

国立善通寺病院改修事業に伴う

きゅうれんぺいじょう

旧練兵場遺跡 発掘調査概報 1

—平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告—



平成15年（2003年）3月

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は国立善通寺病院改修事業に伴い、平成13・14年度に実施した旧練兵場（きゅうれんぺじょう）遺跡の発掘調査事業のうち、平成13年4月から平成14年7月までの調査内容をまとめた概要報告書である。
2. 本遺跡は、香川県善通寺市仙遊町2-1-1に所在する。
3. 発掘調査は、厚生労働省から委託された香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施したものである。
4. 発掘調査体制は以下のとおりである。
香川県教育委員会事務局文化行政課
課長 北原和利 副主幹 大山真充 係長 西岡達哉（～13年3月）片桐孝浩（13年4月～）
文化財専門員 古野徳久・宮崎哲治（～13年3月）・佐藤竜馬（13年4月～）
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長 小原克己 次長 川原裕章（～13年3月）・渡部明夫（13年4月～）
主任文化財専門員 藤好史郎 参事 梅木正信・河野浩征 文化財専門員 森下英治
主任技師 黒木康弘 調査技術員 森 麻子
5. 本書挿図中の座標は第4系国土座標値に基づき、レベル高はすべてT.P.である。挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の数値地図「50,000分の1地形図」を使用した。
6. 発掘調査にあたっては、国立善通寺病院、善通寺市教育委員会、その他関係各位より多大なご協力、ご援助を得た。
7. 本書の執筆、編集は森下が行った。

目 次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 周辺の遺跡と既往調査の概要	2
3. 調査地の地形と縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構・遺物	7
4. 弥生時代中期の遺構・遺物	9
5. 弥生時代後期・終末期の遺構・遺物	12
<竪穴住居の概要>	12
<SH31・SK11 出土土器>	14
<SH29 出土土器>	15
<SH09・04 出土土器>	16
<SH27 出土土器>	16
<SK08 出土土器>	17
<SH02・SH42・SH44 出土土器>	18
<土器棺墓>	22
<青銅器・玉類>	23
<鍛冶関連遺構・遺物>	24
<砥石>	29
<流路SR02 上層溝>	30
6. 古代の遺構・遺物	33
7. まとめ	34

1. 調査に至る経緯と経過

旧練兵場遺跡は旧日本陸軍普通寺練兵場用地が戦後再開発された際、弥生時代を中心とする壺棺等の墳墓遺構が発見されたことによって確認された遺跡である。遺跡は仲村廃寺（伝導寺跡）を東端とし、西は現弘田川沿いまでを含む約 50ha に広がり、遺跡内には厚生労働省所管の国立普通寺病院や、農水省所管の独立行政法人 近畿中国四国農業研究センター 四国研究センターなどの公共機関が存在する。

平成 11 年秋、厚生労働省四国厚生支局および国立普通寺病院より県教育委員会事務局文化行政課へ、今回の事業に関する照会があった。照会内容は、国立普通寺病院統廃合に伴う改修事業予定地において、対象となる範囲の一部について事前に発掘調査を行い、遺跡内容の確認と記録を作成するというものである。協議の結果、平成 12 年度大規模発掘調査事業の当初計画に組み入れ、12 ヶ月で 8,000 m²の範囲の発掘調査を行うことで合意したが、予算確保等の関係上、平成 13 年度に実施する運びとなった。

平成 13 年度の発掘調査は、4 月 12 日～18 日に予備調査を行い、調査範囲内の遺構遺存状況を確認した後、4 月 23 日から本調査を開始した。調査の結果、弥生時代のみならず古代の条里遺構の遺存状態も良好であることが判明した。しかし想定を上回る遺構密度と遺構の重複に手間取り、最終的には平成 13 年度の 12 ヶ月で 3,250 m²の調査面積となった。引き続き、平成 14 年 4 月～7 月の 4 ヶ月を要して、750 m²の調査を行った。平成 13 年 10 月 28 日には現地説明会を実施し、約 150 人の見学者があった。なお、調査区は写真 1 に示したように、調査順にしたがって A 区 (1,000 m²) B 区 (1,000 m²) C 区 (500 m²) D 区 (470 m²) E 区 (630 m²) F 区 (400 m²) の 5 区画に区分した。

調査記録は平面図・断面図を実測により作成し、適宜調査員による写真撮影、併せてクレーンによる俯瞰撮影・写真測量を行った。また、弥生時代中期の掘立柱建物より出土した焼土塊の熱ルミネッセンス分析を奈良教育大学長友恒人氏に、出土獣骨・植物遺体等の鑑定を国立奈良文化財研究所の松井章氏にそれぞれ依頼した。鍛冶関連遺構・遺物については愛媛大学村上恭通氏より指導を受け、たたら研究会大澤正己氏による冶金学的分析所見を受領した。

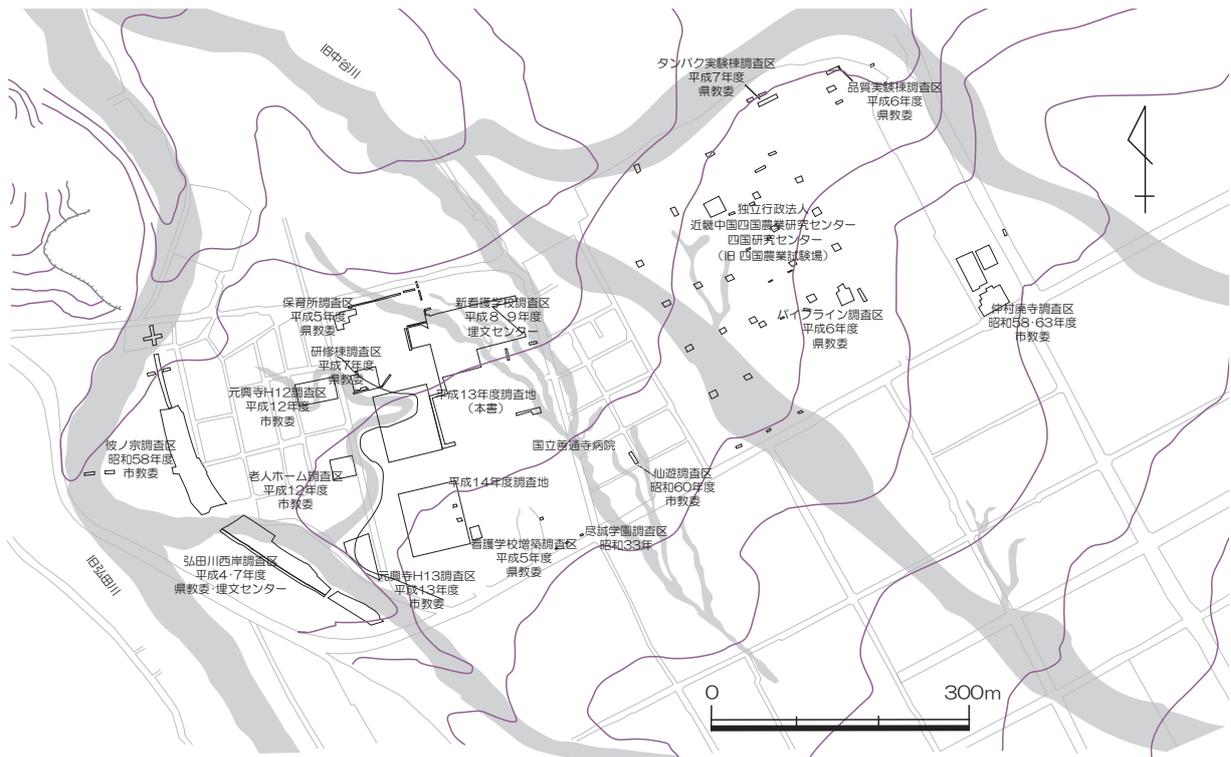


図 1 旧練兵場遺跡における発掘調査地分布図

2. 周辺の遺跡と既往調査の概要

旧練兵場遺跡が所在する香川県善通寺市は丸亀平野の西端に位置する。遺跡の南および西は大麻山などの山塊が迫り、その前面に形成された扇状地を弘田川が北流する。遺跡はこの川が形成した扇状地の緩やかな傾斜面に展開する。扇状地形成段階に堆積した砂岩を中心とする砂礫層は、丸亀平野の現地表下-5 mまでの範囲に認められる(森下編 1997)。今回の調査範囲内にも、円礫層を基盤とする遺構面がみられた。この礫層を覆う黄色系シルト層には縄文期の遺物を含むことがある。既往調査資料(片桐編 1996)や近隣の永井遺跡などでは、縄文時代後期ごろの土器・石器が確認されている(渡部編 1990)。弥生時代および古代の遺構はこの黄色系シルト層を基盤とする。

弥生時代前期は金倉川や弘田川の河川沿いに概ね5 kmほどの間隔を保ちながら遺跡群が分布する。中の池遺跡は5重の環濠を有する環濠集落である。そのほか龍川五条・五条・三井などでも環濠が知られ、前期集落では一般的に環濠をもつが、当遺跡ではまだ環濠の有無は明かでない。龍川五条遺跡では環濠に囲まれた居住域とそれに付属する墓域があり、墓域には周溝墓と木棺墓が分布する(信里 2002)。

前期後半あるいは中期前半から始まって凹線文が盛行する中期後半まで継続する遺跡は少ないが、旧練兵場遺跡は前期から連綿と各時期の遺構が確認されており、平野内では異質である。中期後半には矢ノ塚遺跡(薦田編 1987)や月信遺跡(笹川編 1991)、吉原火上山遺跡(岩橋 1991)など丘陵裾や丘陵斜面に立地する遺跡が多く、平野中央部では遺跡分布が希薄である。各遺跡では掘り形が方形となる掘立柱建物が特徴的である。丘陵を控えた扇状地斜面部に立地する矢ノ塚遺跡は、周溝をもつ竪穴住居跡を中心に複数の掘立柱建物が付属する2~3つの単位に区分することができる。掘立柱建物は梁間が1間で長く、当地域に特徴的な掘立柱建物で、旧練兵場遺跡でも普遍的に分布する形式である。なお当遺跡周辺山塊では青銅器類が特に集中して出土する。弥生中期におけるこの地域の拠点性が窺える(森下 1999)。

後期中葉では旧練兵場遺跡を中核として周辺微高地に稲木遺跡(笹川 1989・西岡 1989)や九頭神遺跡(笹川 1988)などが出現する。稲木遺跡ではヤリガンナや刀子など鉄器が多く出土する。後期後半から終末期に至ると、各遺跡とも集落規模および居住遺構の密度がきわめて高くなる傾向が窺え、古墳時代前期前半まで継続する。

墓制は後期後半から終末期にかけて王墓山古墳下層から箱式石棺や小竪穴式石室などが出土(笹川編 1992)し、旧練兵場遺跡内の仙遊遺跡(笹川編 1986)や周辺の九頭神遺跡(笹川編 1988)でも同様の墳墓が確認されている。そのほか今回の調査でも出土した土器棺墓も後期後半を初現として遺跡内に多数分布しており、当遺跡南西の香色山一帯にも多く分布する(笹川編 1996)。

古代は稲木遺跡や金蔵寺下所遺跡などにおいて7世紀中葉に掘立柱建物を主体とする集落が確認されている。これらは7世紀末から8世紀初頭に至ると一斉に現在の条里型地割に合致する方向に建物が改築されている(森下 1997)。また善通寺市街地内の生野本町遺跡では同時期の長大な柱穴列が確認されており、官衙的性格が推定されている(國木 1993)。善通寺市内では古代寺院が2カ寺存在する。仲村廃寺は当遺跡の一角に位置し、昭和63年度の発掘調査(笹川編 1984)で、磁北から10°西偏した土壇が確認されており、周辺の条里型地割の方向とは合致しない。それに対して、善通寺跡は現存する築地基壇の方向性が地割合致する。仲村廃寺では面違鋸歯文を周縁に施文する川原寺式軒丸瓦が出土しており7世紀後半代の築造が予想される。

当遺跡の既往調査を概観すると、戦後から郷土史家を中心とした有志の手により、当時としてはレベルの高い調査が実施されている(矢原 1973)。昭和33年には尽誠学園に伴う初めての発掘調査が行われ、弥生時代・古墳時代の集落跡であることが確認された(尽誠学園史学会 1959)。昭和57年以後の行政機関による発掘調査は主に公共工事に伴うものであるが、着実に調査成果を蓄積し、微地形が判明しつつある。中谷川を北限とする範囲において、大小の埋没流路に区切られた複数の微高地が存在することがわかる(図1)。

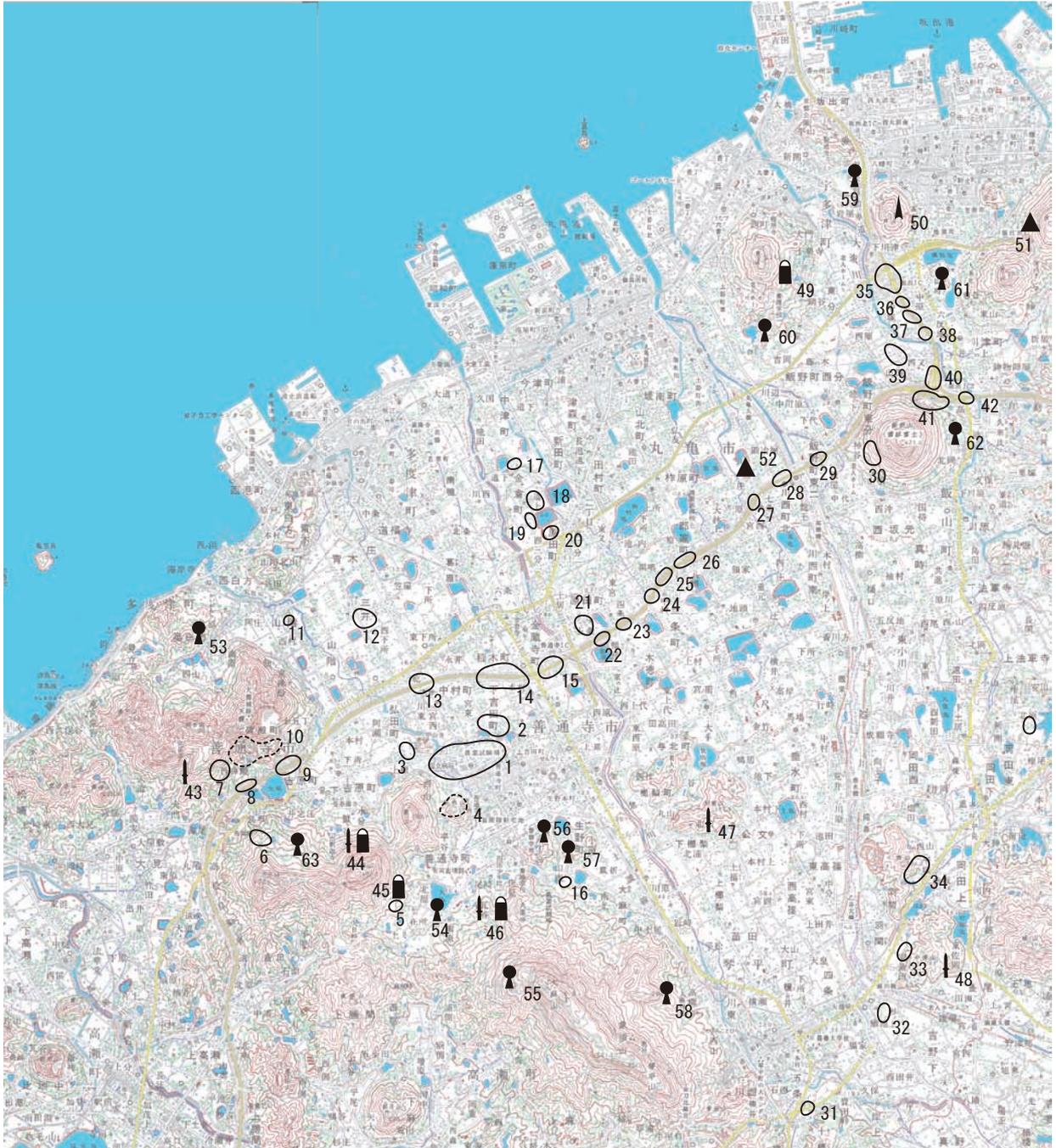


図2 旧練兵場遺跡周辺弥生時代遺跡分布図

- | | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|-------------------|
| 1 旧練兵場 (縄文～現代) | 17 道下 (弥生前) | 33 羽間 (弥生後) | 49 青野山 (青銅器) |
| 2 九頭神 (弥生後) | 18 中の池 (弥生前) | 34 室塚 (弥生後 墳墓) | 50 角山 (青銅器) |
| 3 甲山北 (弥生前) | 19 平池西 (弥生前) | 35 下川津 (弥生前・後) | 51 金山 (サヌカイト原産地) |
| 4 香色山 (弥生後) | 20 平池南 (弥生前～後) | 36 川津下塚 (弥生後) | 52 双子山 (サヌカイト原産地) |
| 5 北原 (弥生後初) | 21 五条 (弥生前) | 37 川津下樋 (弥生前・後) | 53 黒藤山 (前方後円墳) |
| 6 吉原火上山 (弥生中末) | 22 龍川五条 (弥生前) | 38 川津二代取 (弥生前・後) | 54 王墓山 (前方後円墳) |
| 7 月信 (弥生中中葉) | 23 龍川四条 (縄文晩・弥生後) | 39 西又 (弥生前・中) | 55 野田院 (前方後円墳・積石) |
| 8 西碑殿 (弥生中末) | 24 三条黒島 (弥生前) | 40 川津一ノ又 (弥生中・後) | 56 北向八幡神社 (前方後円墳) |
| 9 矢ノ塚 (弥生中～後) | 25 郡家原 (弥生後) | 41 川津東山田 (弥生後) | 57 磨白山 (前方後円墳・石棺) |
| 10 天鷲山南東麓 (弥生中) | 26 郡家一里屋 (弥生後) | 42 川津川西 (弥生中・後) | 58 丸山 (前方後円墳・積石) |
| 11 船岡山 (弥生後) | 27 川西北七条1 (弥生後) | 43 弥谷山 (青銅器) | 59 田尾茶白山 (前方後円墳) |
| 12 三井 (弥生前) | 28 川西北鍛冶屋 (弥生前) | 44 我拝師山 (青銅器) | 60 吉岡神社 (前方後円墳) |
| 13 永井 (縄文後～弥生) | 29 飯野東二瓦礫 (弥生後) | 45 北原シメツヒ (青銅器) | 61 連尺茶白山 (前方後円墳) |
| 14 稲木 (弥生前・後) | 30 飯野山西麓 (弥生中・後) | 46 瓦谷 (青銅器) | 62 三の池 (前方後円墳) |
| 15 金蔵寺下所 (弥生前) | 31 買田岡下 (古墳前) | 47 陣山 (青銅器) | 63 大窪経塚 (前方後円墳) |
| 16 山南 (弥生前) | 32 吉野下秀石 (古墳後) | 48 佐岡 (青銅器) | |

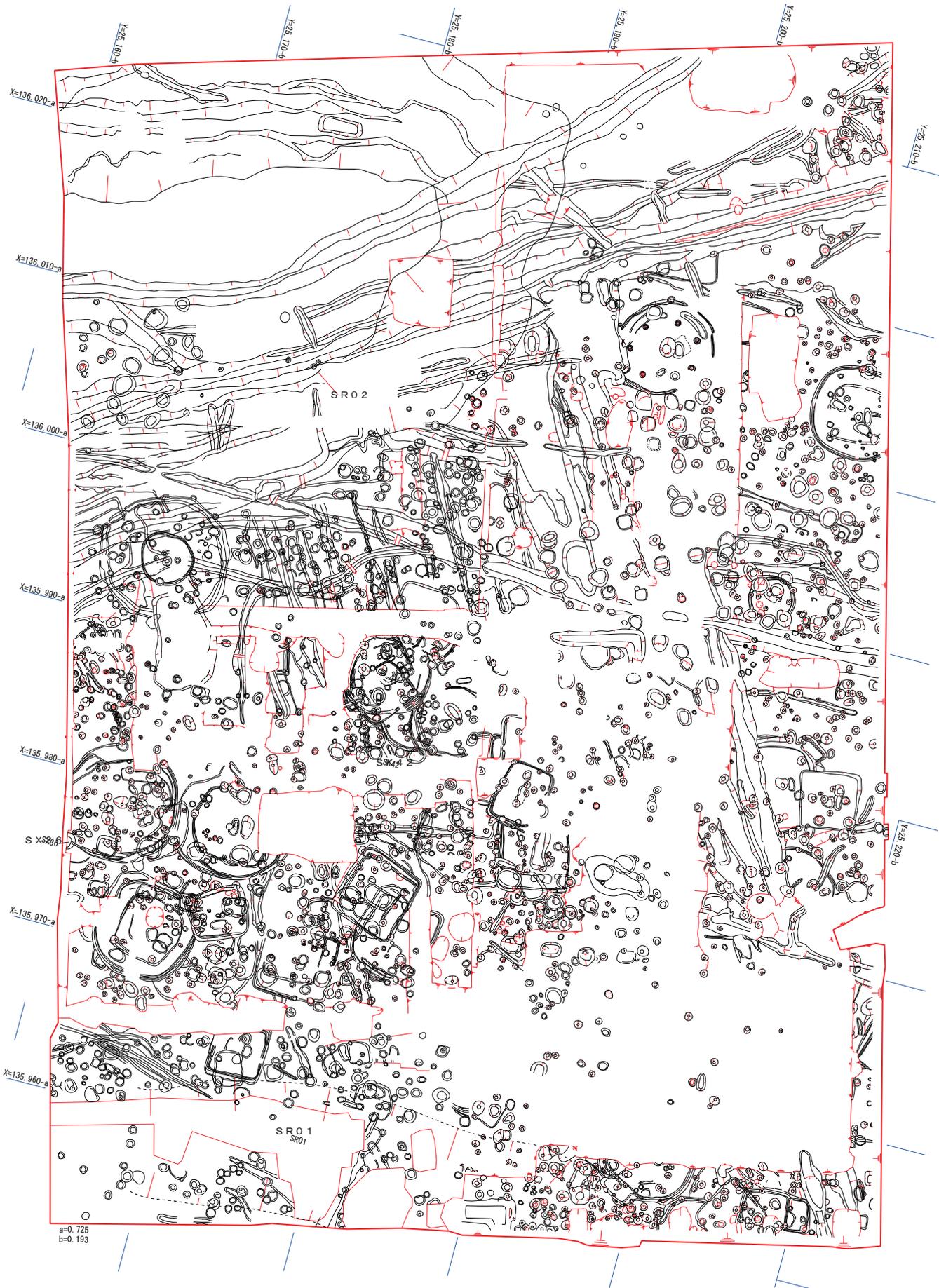


图3 平成13年度・平成14年度上半期 遺構全体分布图



写真1 平成13年度・平成14年度上半期調査範囲空中写真

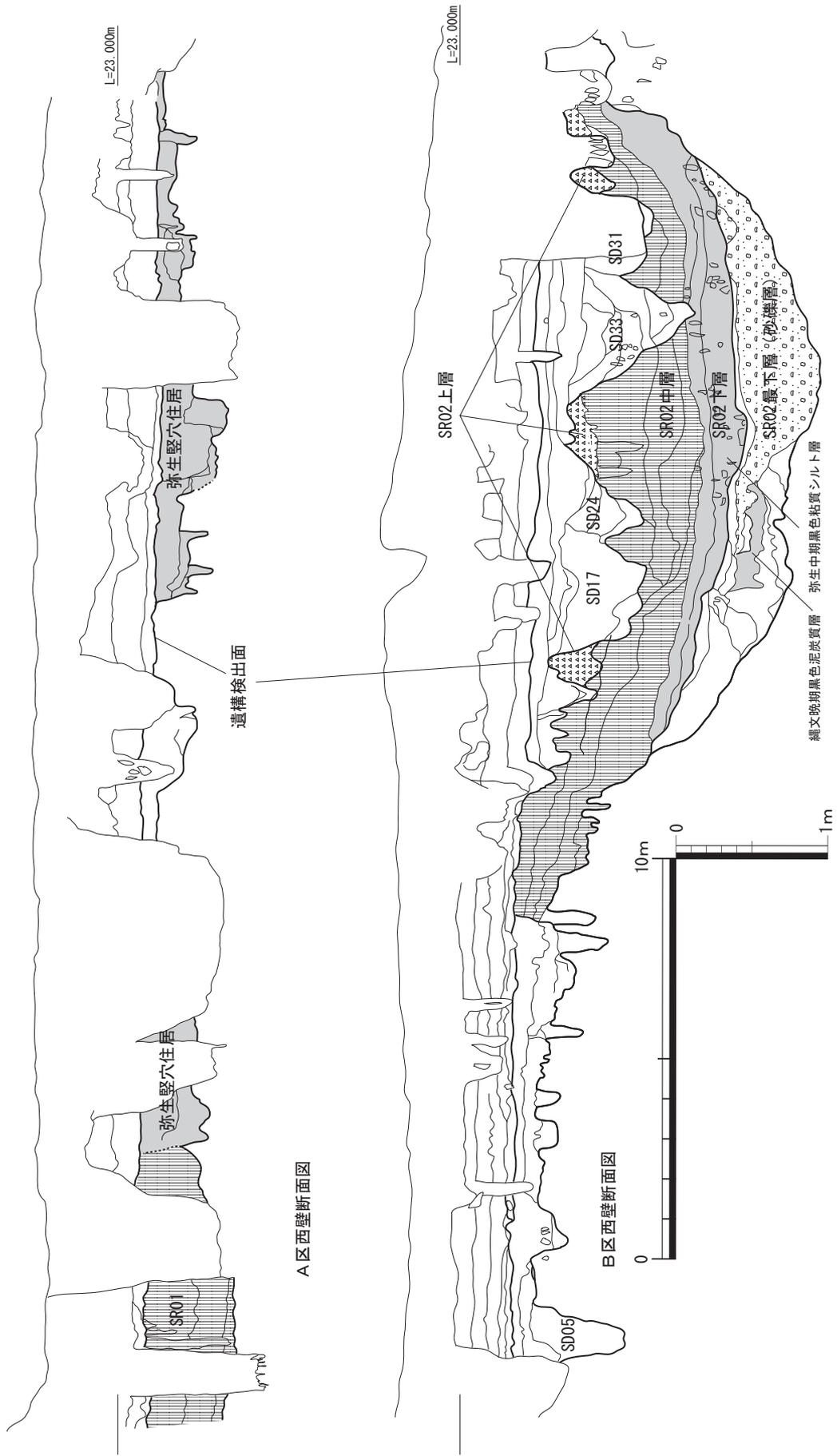


図4 調査区南北縦断面図

3. 調査地の地形と縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構・遺物

調査地内には北側と南側の2箇所に低地帯がある。調査地北端で東から西へ流れる自然流路SR02では、現地地表下約3mで縄文時代晩期後半古相の突帯文土器(1～3)・石器や堅果類・植物種子等の自然遺物を含む茶色泥炭質層を確認した。河床堆積の砂礫層に挟まれ、層厚約15cmで確認できる。その上部には層厚約10cmの黒色粘土層が堆積し、弥生時代中期中葉の土器・板状木製品などが出土する。SR02の基盤層は扇状地堆積の砂岩円礫層と砂層の交互層である。この場所の扇状地堆積の下限が縄文時代末であったことを示す。

一方、調査区南端で確認した自然流路SR01は、幅10m以上の流路である。扇状地堆積礫層の浅い窪地に連続的に堆積した黄色系土層の一単位にコンテナ2箱ほどの弥生前期前半の土器群が含まれる。明確な開析肩は確認できなかったが、土器群はレベルを揃えて比較的密集して出土したことから、一時期の窪面に短期間に投棄されたものと目される。SR01土器群出土層は扇状地堆積終了後に残った後背湿地の最終埋没層である。弥生前期以後、両低地帯に挟まれた微高地には弥生時代から現代までの遺構が同一面で重複・密集する。

弥生時代前期の遺構はC区で直径0.5～1mの土坑を3基確認した。調査区西壁際のSX36は直径1m、深さ0.55mの円形土坑である。埋土は基盤土ブロック・礫とともに遺存状態が良好な土器(5～13)を含み、短時間で埋め戻されたものと考えられる。壺(5～7)2点は口縁部が無段で外反が弱く、甕は2条単位の沈線文間に木葉文系モチーフを施すもの(10)、口縁から大きく下がった位置に刻目突帯を貼付する突帯文系甕(13)などがあり、口縁部の外反度も弱い。前期前半期でも古相を示す一群である。同時期の遺構は、平成8年度弘田川西岸調査区で筒状土坑1基、平成12年度元興寺調査区で自然流路が確認されている。SK42はC区北東付近で確認した直径約1m、深さ0.45mの土坑である。埋土の状況はSX36と同様に、短時間のうちに遺存良好な土器を伴って埋め戻されたものと考えられる。埋土中より、前期前半新相の壺・甕が出土している。



写真2 E区SR02全景(南より)



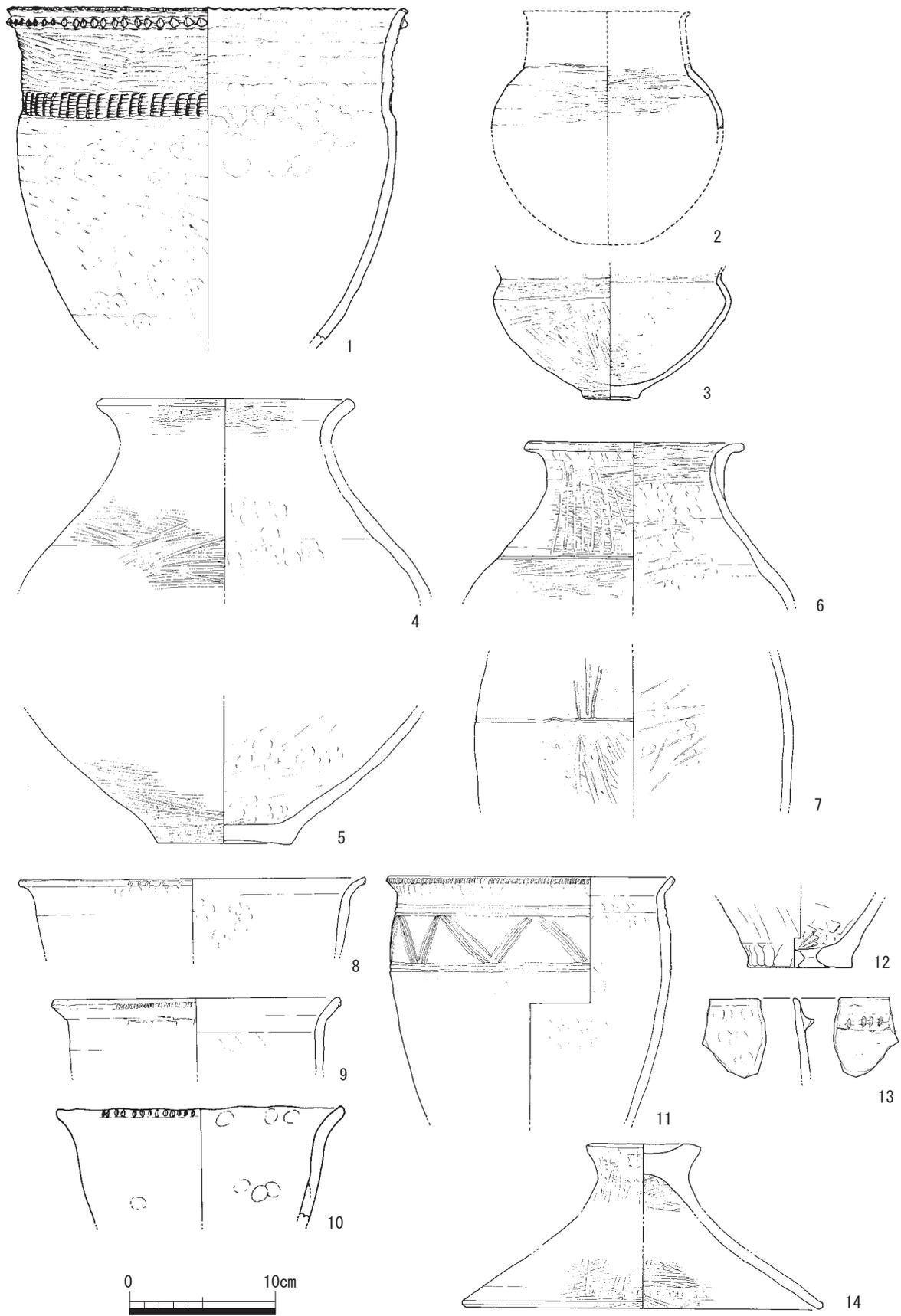
写真3 F区SR01全景(東より)



写真4 SR01 弥生前期土器出土状況



写真5 D区SK42(東より)



1~3 B区 SR02最下層

4~14 C区 SX36

图5 縄文晚期・弥生前期土器実測図

4. 弥生時代中期の遺構・遺物

中期の遺構は微高地上で竪穴住居 1 棟, 掘立柱建物 22 棟, 溝 1 条, 方形土坑 2 基, 不整形土坑 1 基を確認した。北側自然流路（低地帯）SR02 では縄文時代晩期堆積層を覆う黒色シルト層より多量の土器と少量の木製品が出土している。出土土器は中期前半新相から後半古相が主体である。黒色粘土層の上部は淡黄灰色系のシルト層が約 0.6 ～ 1.0 m の厚さで堆積する。この層には中期後半新相の土器が多く, 最終堆積層に後期初頭頃の土器片を含む。

竪穴住居 D 区 SH55 は直径 8 m の壁溝様の周溝内側に支柱穴列, 直径 3.3 m, 深さ 7 m の円形掘り方, その中央部に炭化物埋積土坑が備わるもので, 中期末に所属する。掘立柱建物は梁間 1 間で桁行 2 間ないし 3 間, 面積 15 ～ 25 m² が主体である。柱穴は概して規模が大きく平面方形と円形がある。一辺（直径）0.7 ～ 1.5 m, 深さ 0.5 ～ 1.0 m で柱痕は 20 ～ 30cm を主体に, 一部 60cm サイズのものもある。掘り方内の埋土はいずれも基盤土に類似し, 掘削前の基盤整地を伺わせる。建物主軸方位で数群のグルーピングが可能だが, 今後出土土器の検討を経て, 詳細な変遷を復元する作業が不可欠である。A 区 SB04（図 7）は柱穴上部に柱抜取穴を留める。抜取穴には多量のブロック状焼土が認められた。焼土は片面が赤く被熱し, 片面が褐色を呈して脆い。同様の焼土は建物の北東部の不整形土坑 SX23 でも多量に出土した。B 区 SB10 は桁行 7 間の長大形の建物である。面積は検出範囲において 48 m² で, 梁間 1 間のタイプとしては県下最大級である。これらの建物は凹線文出現直前から中期末までの時期幅をもつ。柱構造は桁行の柱間の長短によって数種に区分可能だが, 柱穴規模が大きい点, 梁間が長く桁行の柱間が短いなどの共通した特徴から, これらの掘立柱建物は高床式の倉庫である可能性が高い。

ある可能性が高い。

溝 SD86 は C 区から D 区に北流し北端で緩やかに東に屈曲する。中期後半新相の土器群（図 8-15 ～ 23）がまとめて出土した。D 区 SH54 は溝に隣接する一辺 2.4 m の方形土坑である。壁溝を有し, 同時期の竪穴住居の可能性もある。F 区では長辺 2.3 m, 短辺 1.9 m, 深さ 0.42 m の方形土坑 SK40 がある。埋土中に多量の炭化物が遺存する。これらの竪穴住居, 溝, 土坑については, いずれも中期後半新相である。一方, 多数確認された掘立柱建物は多くが中期後半中相以前に位置づけられる。両者の所属時期が異なることから, 倉庫群から居住域への土地利用の変化が推定できる。

E 区自然流路 SR02 は掘立柱建物と同時期である。下層の黒色シルト層より, 多量の土器とともに, 木製農具や板状木製品などが出土した。同じ層位で出土したサヌカイト板状大形剥片（重量 2.7kg）は, 刃部に顕著な使用痕が認められる。祭祀遺物として分銅形土製品が 2 点出土している。

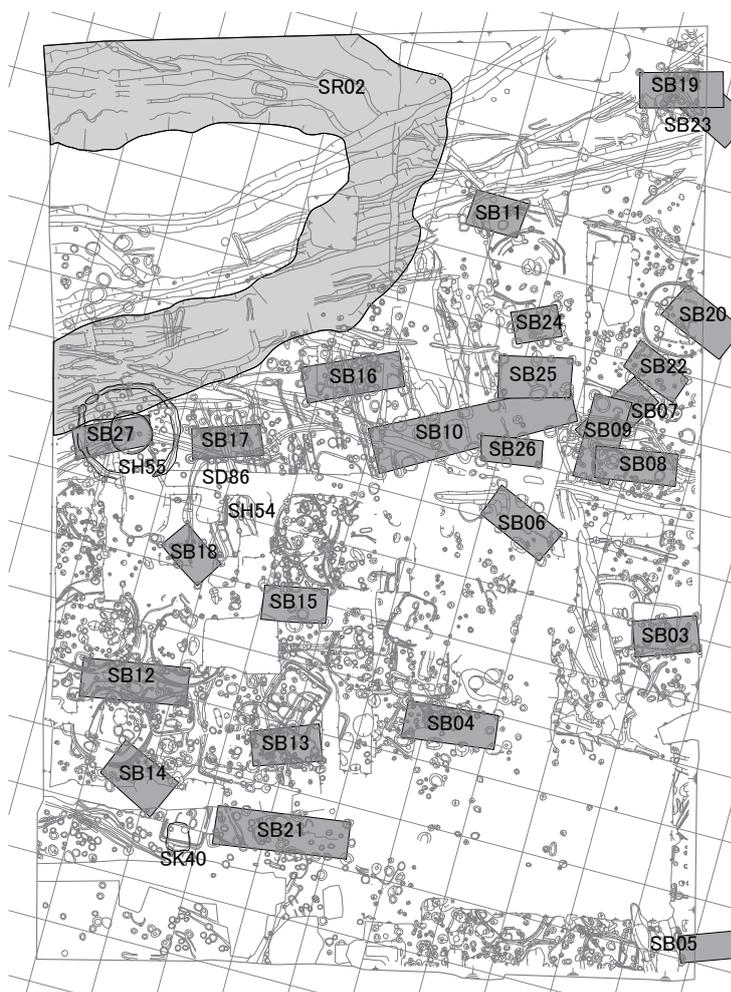


図 6 弥生時代中期遺構分布図

遺構番号	調査区	時期	構造	桁行(m)	梁行(m)	面積 (㎡)	柱穴形状	柱穴規模 (cm)	柱痕規模 (cm)	主軸方位	備考
SB01	A区	奈良	2×3?間	5.9	3.5	20.7	円形	φ 60	φ 20	N-31-W	総柱構造
SB02	A区	古墳?	2×3間	5.9	4.2	24.8	円形	φ 65	φ 25	N-10-W	束柱付属
SB03	A区	IV-1	1×3間	7.5	2.8	21.0	方形	一辺 60	φ 20	N-18-W	東側は平成9年度調査
SB04	A区	IV-1	1×3間	7.3	2.8	20.4	方形	一辺 70 ~ 102	φ 20 ~ 35	N-7-W	柱抜き, 焼土投棄
SB05	A区	IV-3	1×?間	不明	2.0	不明	方形	一辺 80	不明	N-13-W	
SB06	A区・B区	III-3	1×3間	5.7	2.8	16.0	方形	長辺 110	不明	N-25-E	
SB07	B区	IV-1	1×2間	6.0	2.9	17.4	円形	φ 100 ~ 120	φ 30	N-33-E	
SB08	B区	IV-2	1×3間	6.7	2.6	17.4	方形	長辺 80 ~ 100	φ 30	N-10-W	
SB09	B区	IV-1	1×3間	6.7	3.0	20.1	円形	φ 70 ~ 90	φ 30	N-0-W	
SB10	B区	III-3	1×7間	16.0	3.0	48.0	方形	一辺 90 ~ 100	φ 28 ~ 35	N-28-W	管玉1点
SB11	B区	IV-1	1×2間	4.3	3.0	12.9	方形	一辺 70 ~ 90	φ 20	N-0-W	
SB12	C区	IV-1	1×3間	8.5	3.0	25.5	方形	長辺 150	φ 30 ~ 60?	N-5-W	
SB13	C区	III-3	1×3間	5.5	2.8	15.4	方形	一辺 70 ~ 90	φ 25	N-20-W	流紋岩根石
SB14	C区・F区	III-2	1×2間	5.3	3.3	17.5	方形	一辺 80 ~ 100	φ 20	N-25-E	流紋岩根石
SB15	C区	IV-1	1×3間	7.0	2.7	18.9	円形	φ 80 ~ 120	φ 20	N-10-W	
SB16	B区・D区	IV-2	1×3間	7.8	2.9	22.6	円形	φ 80 ~ 100	φ 20	N-25-W	柱抜き, 焼土投棄
SB17	D区	IV-2	1×3間	5.4	2.4	13.0	円形	φ 80 ~ 100	φ 20	N-20-W	
SB18	C区・D区	IV-2	1×2間	4.3	2.5	10.8	円形	φ 60 ~ 80	φ 20	N-35-E	
SB19	B区	V-2	1×2+間	4.5+	2.8	12.6+	円形	φ 60 ~ 80	φ 20	N-15-W	
SB20	B区	IV	1×2+間	4.0+	3.2	12.8	方形	一辺 80 ~ 100	φ 20	N-25-E	
SB21	F区	IV-2	1×2間	8.2	3.0	24.6	方形	一辺 80 ~ 100	φ 20	N-10-W	桁行柱間が広い
SB22	B区	IV-1	1×2間	4.9	2.3	11.3	円形	φ 60 ~ 80	φ 20	N-25-E	
SB23	B区	V-1	1×2+間	3.5+	2.5	8.8+	円形	φ 60 ~ 80	φ 20	N-34-E	
SB24	B区	IV-1	1×1間	3.7	2.6	9.6	方形	一辺 80 ~ 100	φ 20	N-25-W	
SB25	B区	IV-1	1×2間	5.5	3.2	17.6	方形	一辺 70 ~ 90	φ 20	N-15-W	
SB26	B区	IV	1×2間	4.6	2.0	9.2	円形	φ 50 ~ 80	φ 20	N-10-W	

※重複関係

(古) SB10 → SB09 → SB07 → SB08 (新)

※時期

SB01・02以外は弥生時代所属 弥生時期区分は大北編 2001 及び 森下 2000 に準拠 今後の整理で変動余地あり

表 1 掘立柱建物一覧表 (弥生時代以後を含む)



写真6 B区SB10全景(西より)



写真7 A区SB04全景(東より)



写真8 SB04柱痕跡断面



写真9 柱抜き後の土器投棄



写真10 柱痕内焼土

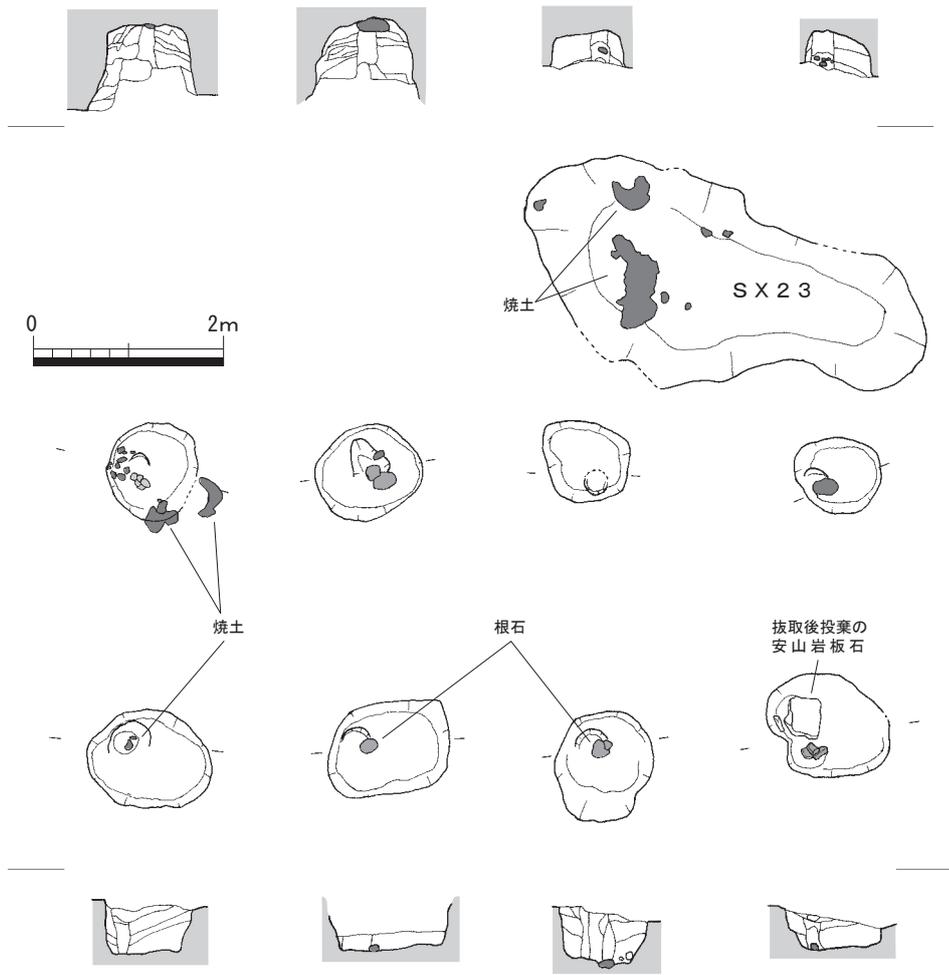


図7 掘立柱建物 SB04 および土坑 SX23 実測図

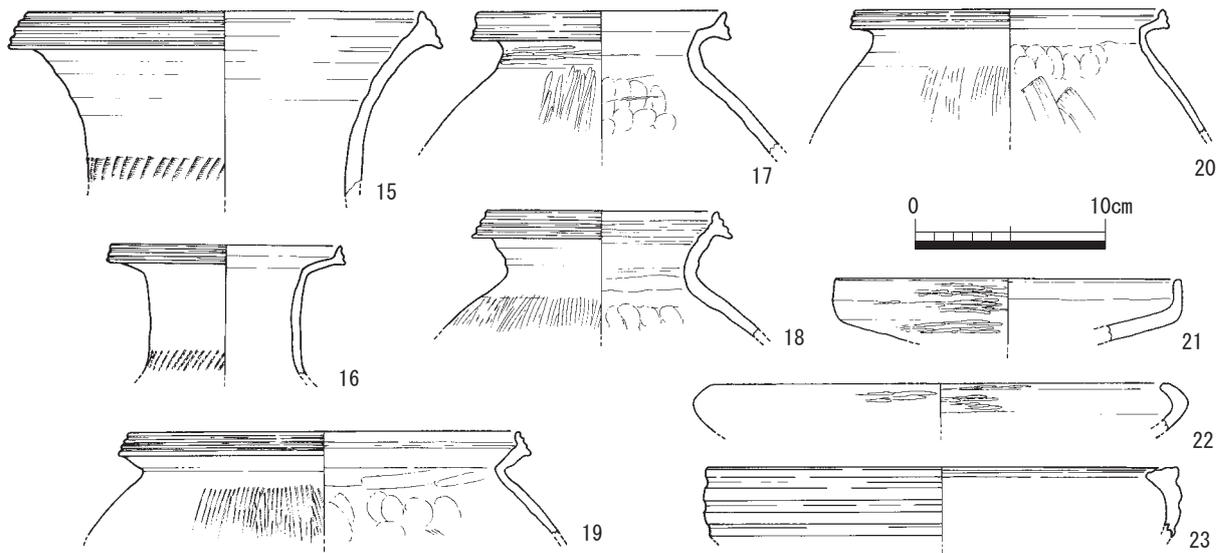


図8 溝 SD86 出土遺物実測図

5. 弥生時代後期・終末期の遺構・遺物

微高地における後期・終末期の遺構は竪穴住居（39棟）が主体である。ほかに土器棺（3基）、土坑（6基）、井戸状遺構（1基）がある。これらの遺構は、激しく重複しつつ継続して構築されており、遅くとも後期後半古相以後は、遺跡内の他の微高地と同様、複数の竪穴住居が建て替えを行いながら同時かつ継続的に存在する景観が想定できる。竪穴住居は、埋没途上に土器投棄を行うもの、炭化材や焼土が伴う焼失住居、基盤層ブロックを多数含み埋め戻したことが明らかなものなど、埋没状態は多様である。竪穴住居の出土遺物には銅鏃・玉類が比較的多く認められた。

北側の低地帯 SR02 には中期堆積層の最上部に後期初頭段階の堆積層（SR02 中層最上部）が部分的に存在する。それらの層を切り込んで、完形品を含む多量の後期後半の土器を伴う溝を確認した（SR02 上層溝）。また溝埋没後にその上部を覆う堆積層（SR02 上層）には、終末期の夥しい土器片等が含まれる。出土遺物中には獣骨なども含まれており、居住域に隣接する廃棄物投棄の場と考えられる。SR02 上層溝土器群・SR02 上層土器群中には、備後・吉備・伊予・土佐・豊後・播磨などからの搬入・搬入系土器が含まれ、特に後期前半から後半古相に多い。また低地帯内の後期後半～終末期堆積層中では短冊形の鉄片や大粒の球状滓・微小鉄片などの鍛冶関連遺物が出土する。後期前半堆積層でも小粒ではあるが同様の球状滓が出土するなど、鉄生産関係資料の存在が確認できた。

<竪穴住居の概要>

主な竪穴住居を表2にまとめた。後期前半が3棟（円2方1）+α。後期後半が15棟で円形が多く貼出付

を含む。終末期は20棟でいずれも方形である。柱構造は後期前半の円形住居が多角形主柱、後期後半が多角形主柱・4本主柱があり、終末期には2本主柱と4本主柱がある。なお、小形方形の住居では中央部に小ピットを主柱穴とするもの（SH09・SH29・SH39・SH52）がある。いずれも廃絶にあたって多量の土器を投棄する。

時期を問わず竪穴住居の床面には貼床が施される。貼床は特に「ベッド状遺構」と呼ばれる有段部の形成と関連する。有段部は例外なく貼床によって作られており、貼床層を切り込んで壁面沿いに小溝（壁溝）が廻る。SH27では有段部の段下端に留板の痕跡が認められた（図13）。数回の建て替え（床の貼替え）が行われているが、最終床面の段下端部に直線的な板痕跡が見られることから、板材を横に渡して段の土留めを行っていたものと考えられる。また、有段部貼床の下部に幅20～30cmの浅溝を廻らせるものもある。SH31は主柱穴列と壁溝との間に溝をめぐる（図10）。SH04は壁溝にかなり近い位置に幅広の溝



図9 弥生時代後期後半～終末期遺構分布図

調査区	遺構番号	時期	形状	張出	床段	長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (㎡)	柱構造	炉跡形状	備考
A区	SH01	終末期	方形	無	不明	4.7	-	-	4本主柱	-	砥石・鉄鏃
A区	SH02	終末期	隅丸方形	無	有	3.8	3.6	10.8	2本主柱	a+b	
A区	SH04	後期後半	円形	有	有	6.4	5.5	34.2	5本主柱	a+b	ガラス玉・複数焼土面
A区	SH05	後期後半	円形	無	不明	5.5	5.5	23.7	4本主柱	b	炉跡取付溝
A区	SH06	終末期	隅丸方形	無	有	3.7	3.4	12.6	2本主柱	a	鉄器・ガラス玉
A区	SH07	後期後半	円形	無	不明	4.8	4.8	18.1	不明	不明	
A区	SH09	後期後半	方形	有	無	3.1	2.7	8.7	中央1本柱	無	土器廃棄
A区	SH10	後期後半	円形	有	有	6.2	5.3	26.0	不明	不明	焼土面
A区	SH11	終末期	方形	不明	不明	3.2	-	-	不明	不明	調査区南端
A区	SH12	終末期	方形	不明	不明	-	-	-	不明	不明	SD01に切られる
A区	SH13	終末期	隅丸方形	無	不明	4.2	3.4	14.3	2本主柱	a	管玉
A区・C区	SH14	後期後半	多角形?	無	不明	6.0	6.0	32.0	不明	b?	銅鏃・勾玉
A区	SH15	終末期	方形	無	有	5.9	5.9	34.8	4本主柱	不明	砥石
A区	SH16	終末期	方形?	不明	不明	-	-	-	4本主柱	a+b	
A区	SH17	終末期	方形	無	不明	4.7	4.5	21.2	4本主柱	不明	規模復元
A区	SH18	終末期	方形	有	不明	4.2	4.0	16.8	4本主柱	不明	規模復元
A区	SH22	終末期?	方形?	不明	不明	-	-	-	4本主柱	不明	主柱穴間 3.7m
A区	SH23	終末期?	方形	不明	有	-	-	-	-	不明	調査区西壁で確認
B区	SH27	後期後半	円形	無	有	5.8	5.7	26.0	4本主柱	a+b	銅鏃・建替数回
B区	SH28	後期前半	円形	無	有	-	-	-	8本主柱	b?	中央下段部径 3.0 m
B区	SH29	後期前半	方形	無	無	2.7	-	-	不明	無	板状鉄斧・複数焼土面
B区	SH31	後期前半	円形	無	有	6.3	6.3	31.2	7本主柱	a+b	朱精製容器・床面より石鏃
C区	SH35	後期後半	円形	無	有	7.4	7.0	40.7	多角主柱	b×3基	銅鏃・ガラス玉・複数焼土面
C区	SH36	後期後半	隅丸方形	無	有	6.2	6.1	30.2	4本主柱	b	
C区	SH37	後期後半	円形	無	不明	6.8	6.8	36.3	5本主柱	b	生粘土塊
C区	SH38	後期後半	円形	無	有	7.4	6.8	39.6	6本主柱	a+b	鉄器
C区	SH39	終末期	方形	無	有	3.7	3.3	12.2	2本主柱	a	砥石・焼土塊
C区	SH41	終末期	方形	無	有	4.8	4.5	21.6	4本主柱	a	銅鏃
C区	SH42	終末期	隅丸方形	無	無	5.9	4.8	28.3	4本主柱	a	銅鏃・焼失住居
C区	SH44	終末期	方形	無	有	4.7	4.4	20.7	4本主柱	a	銅鏃
C区	SH46	後期後半	円形	不明	不明	4.6	4.6	16.6	4本主柱	b?	
C区	SH48	後期後半	円形	無	有	5.4	5.2	22.1	6本主柱	b	ガラス玉
C区	SH49	後期後半	円形	不明	不明	4.5	4.5	15.9	4本主柱	不明	
C区	SH50	終末期	方形	無	有	3.6	3.1	11.1	4本主柱	a	鉄片・ガラス玉
C区	SH51	後期後半	多角形	有	有	4.9	4.8	19.7	5本主柱	c	鍛冶炉・鉄片
C区	SH52	終末期	方形	無	無	4.3	3.9	16.8	1本主柱	無	鉄片・焼土塊
D区	SH54	中期末	方形	無	無	2.4	-	-	無	無	
D区	SH55	中期末	円形	無	有	8.3	8.3	54.1	多角主柱	b	炭化物塊
F区	SH56	終末期	方形	無	有	3.5	3.5	12.3	2本主柱	a	銅鏃
F区	SH59	終末期～古墳前	方形	無	有	-	-	-	2本主柱	a	線刻土器

表2 主要竪穴住居一覧表

を廻らせる (図 12)。これらは住居構築工程に由来する可能性が考えられる。SH04 では有段貼床部埋土中よりガラス小玉が1点出土した。また、住居の一部が方形に張出す平面形態もある。SH04・SH10・SH51は円形住居、SH09は方形住居にそれぞれ張出し部をもつ。

床面炉跡は住居中央にピット様の深い土坑を留めるもの (b)、浅い土坑に炭化物が薄く堆積する長楕円形のもの (a)、両者が組合わさるものなどがある (a+b)。SH04・SH27・SH31は両者の組合せが見られ、播磨地域などで多く分布するいわゆる「10型中央土坑」(多賀 1996) と呼ばれるものに類似する。ただし、播磨とは土坑配置の方位が異なるようである (松本 2000)。a+bの形態は終末期の住居では見られず、後期後半を下限とする。終末期はa形態が主体である。

また、SH42は垂木が放射状に床面に焼け落ちた焼失住居である。床面直上には被熱して赤化しさらに硬化した焼土が多量に出土した。出土状況からみて一部に土壁あるいは土葺屋根が用いられたことを示す。これとは別に、埋土中にブロック状にまとまった焼土が出土することもある。床面直上もしくは床面から5cm程度浮いて出土する。炭化材を伴わない焼土塊は、後述する鍛冶作業との関係を考えることも必要である。

以下、主に竪穴住居出土土器に関して説明を加える。

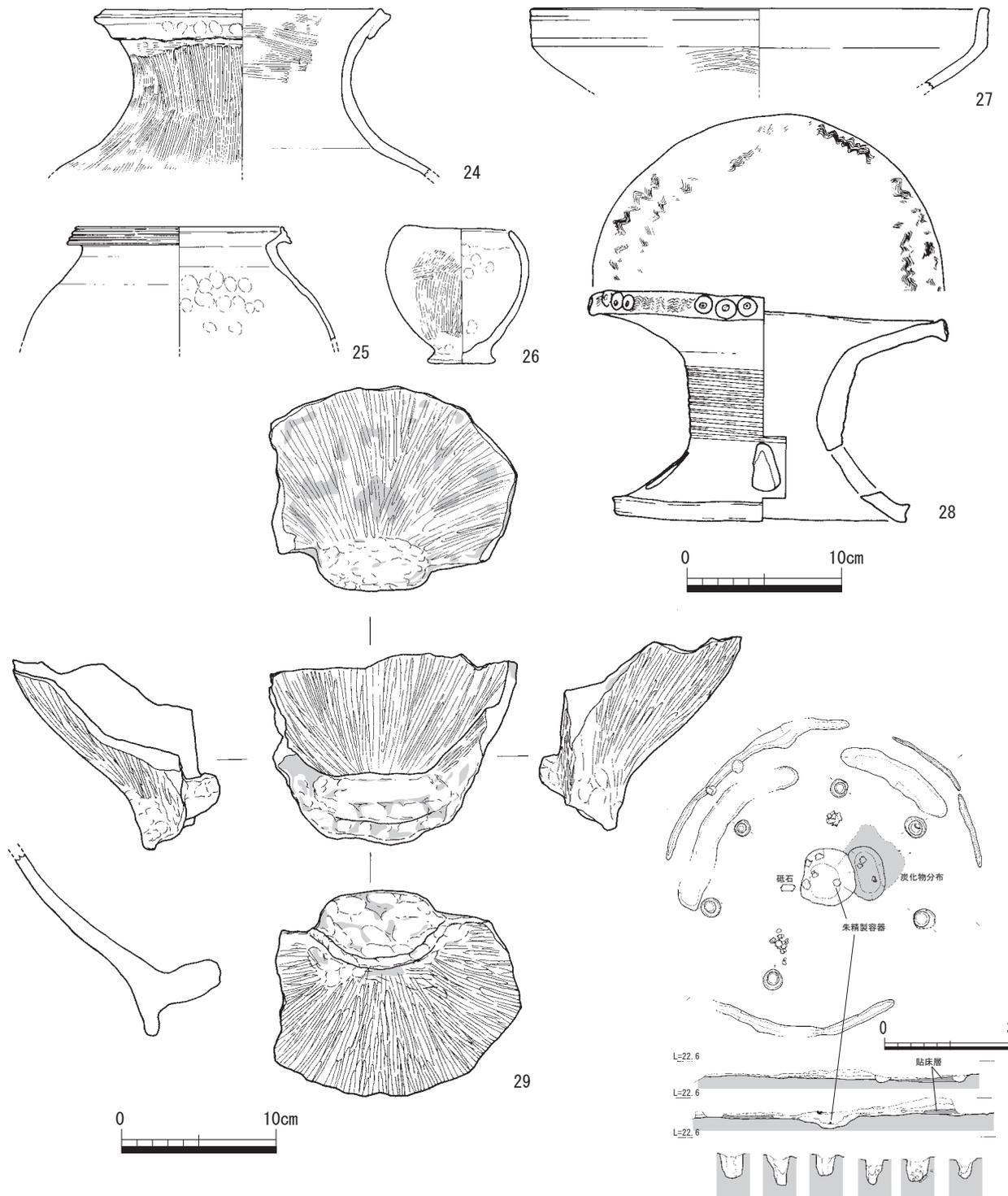


図10 竪穴住居 SH31 および出土遺物実測図

< SH31・SK11 出土土器 > (図11)

後期初頭の土器資料である。24は口縁部に粘土帯を貼付する広口壺。粘土帯下端部の接合痕は明瞭で、粘土帯外面に指押さえ痕を留める。外面はタテ刷毛調整。南四国地域に特徴的ないわゆる土佐甕の伝統をもつ壺形態である。胎土はにぶい橙褐色で粗い砂粒は混じらず、当遺跡に一般的な土器胎土と異なることから、搬入土器と考えられる。25～27は中期末の形態を引き継ぐ在地系土器。29は高松市上天神遺跡で多く知られる「朱精製容器」(大久保1995)である。焼成前の土器を半裁して体部を皿状に、底部を把手状に成形。表裏面に丁寧なミガキ調整を加えて容器とする。内面全面と、外面把手部を中心に朱が付着する。また、側縁の割れ

口にも朱が付着することから、割れた状態で使用していたことがわかる。胎土は粗い砂粒を含む在地系である。SH31 中央土坑より出土した。なお、28 の器台は A 区 SK11 出土品で、後期前半の土器に伴う。

< SH29 出土土器 > (図 11)

後期前半中相の土器資料である。口縁部に凹線を施文する個体も多いが、33 はすでに凹線文が退化する。34 は口縁部内面の屈曲部稜線が失われ、緩やかなカーブに変化したもので、35 や 36 にも共通する。32 の直口壺は後期初頭に多い器種だが、口頸境の突帯貼付位置がやや体部側に移行する。38 は口縁部を斜め下方に拡張し、シャープに仕上げていることから、装飾高杯と目される。41 は後期後半に一般的な形態だが、後期前半にも少数ながら組成する事例が多い。40 の凹線文をもつ大型鉢は中期後半に通有の形態を保持しており、伝統形態を引き継ぐ。

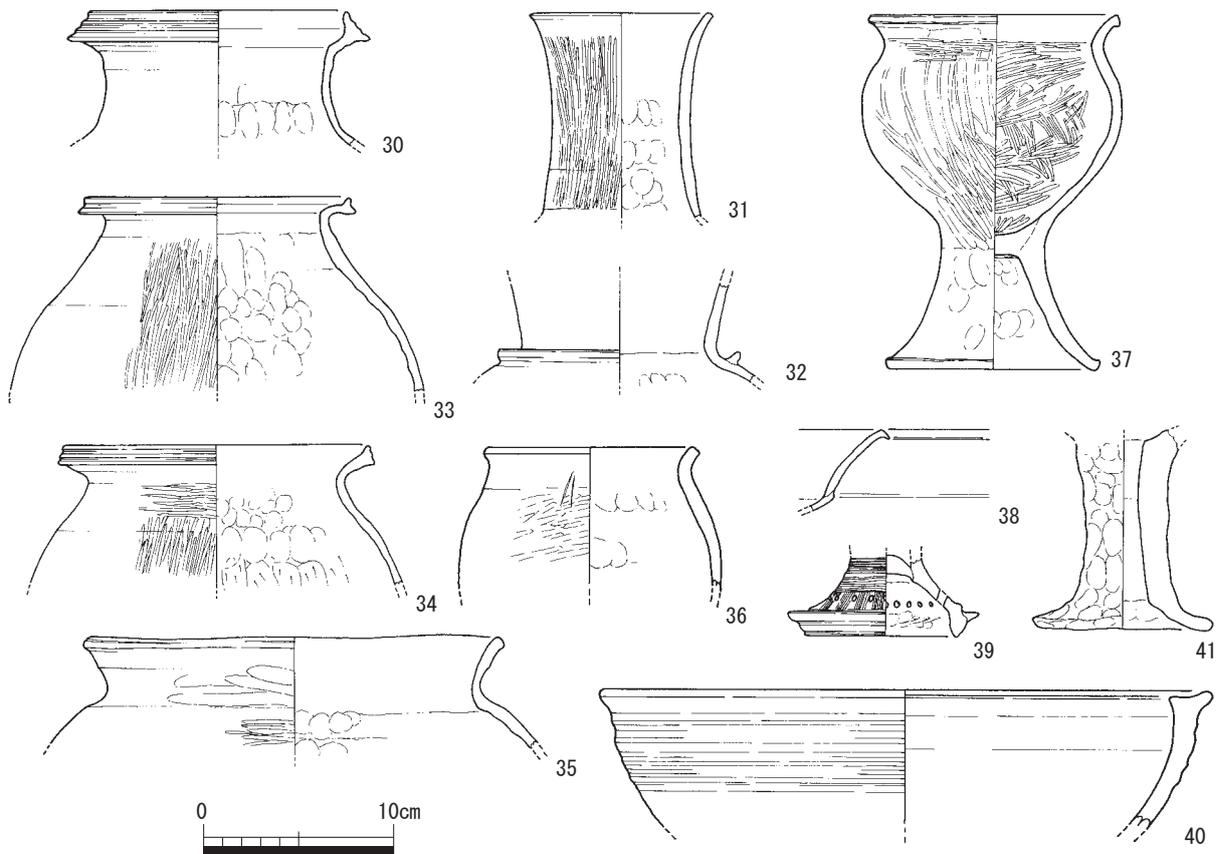


図 1 1 竪穴住居 SH29 出土遺物実測図



写真 11 B 区全景 (北西より)



写真 12 A 区 SH02・04 (北より)

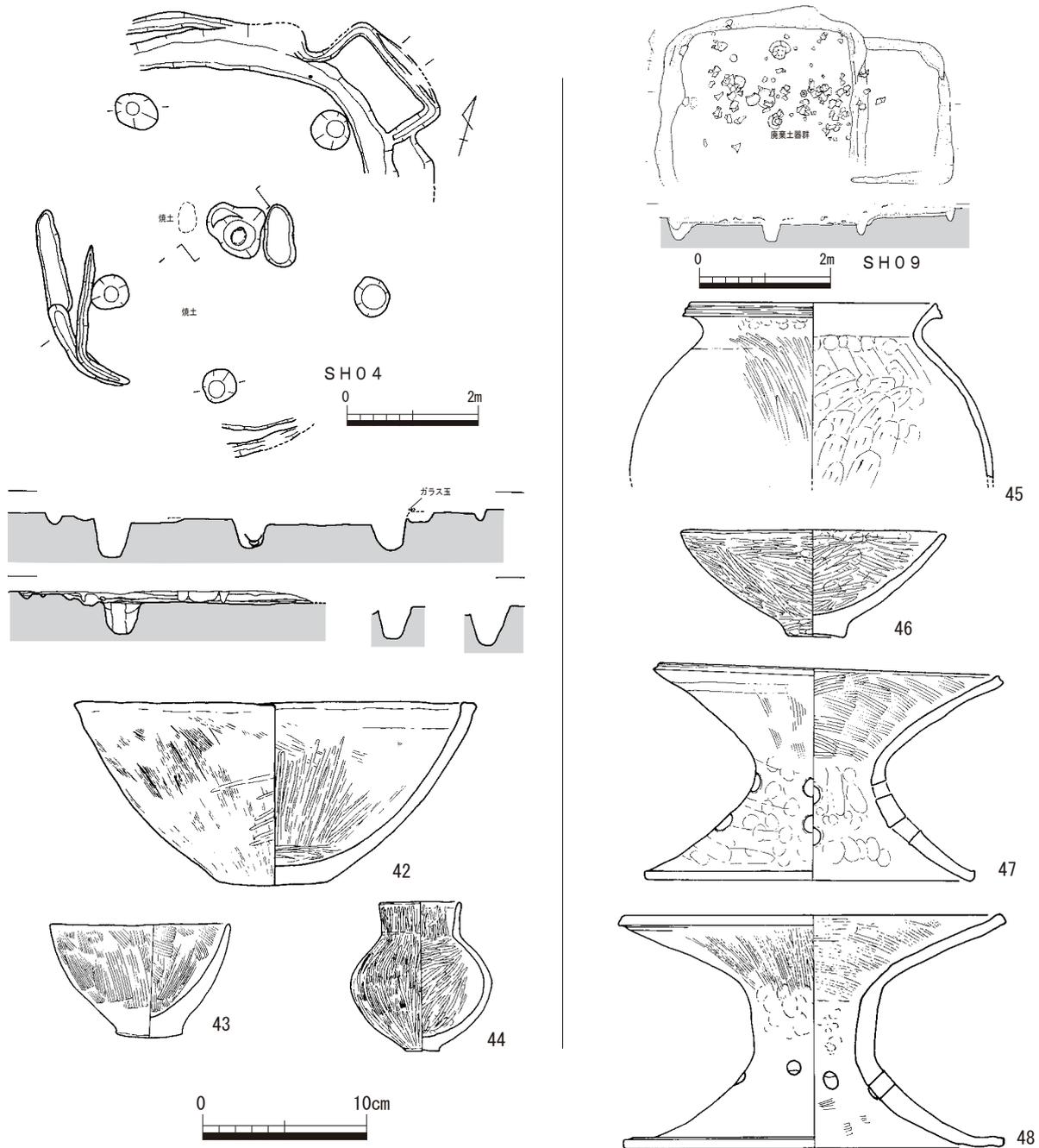


図 1 2 竪穴住居 SH04・SH09 および出土遺物実測図

< SH04・SH09 出土土器 > (図 12)

SH09 は張出しをもつ方形住居で、埋土下部に多量の土器が投棄されていた。後期後半古相の一括資料である。図化はしていないが、高杯脚部片と器台が目立つ組成である。45 の甕は凹線文を留めるが口縁屈曲部が弛緩し、内面ヘラ削り調整が胴部の大半に及ぶ形態。47・48 は凹線文の退化や筒状体部の鈍化が認められる器台で、当地域における器台の最終形態に位置づけられる。46 の鉢は、SH04 の 42・43 と同様に安定した平底ないし上げ底の形態を留める。44 は出現期の小形壺である。

< SH27 出土土器 > (図 13)

後期後半古相の土器資料である。50 は依然として凹線文を留めた甕だが、口縁部が短く胴部上半の張りを失っている。49 は口縁部が上方に立ち上がる特徴的な形態で、胴部上半は撫肩となる。吉備地域に通有の形態である。胎土は在地系で粗い砂粒を含む。52 は底部に小孔を穿つ甑形土器である。

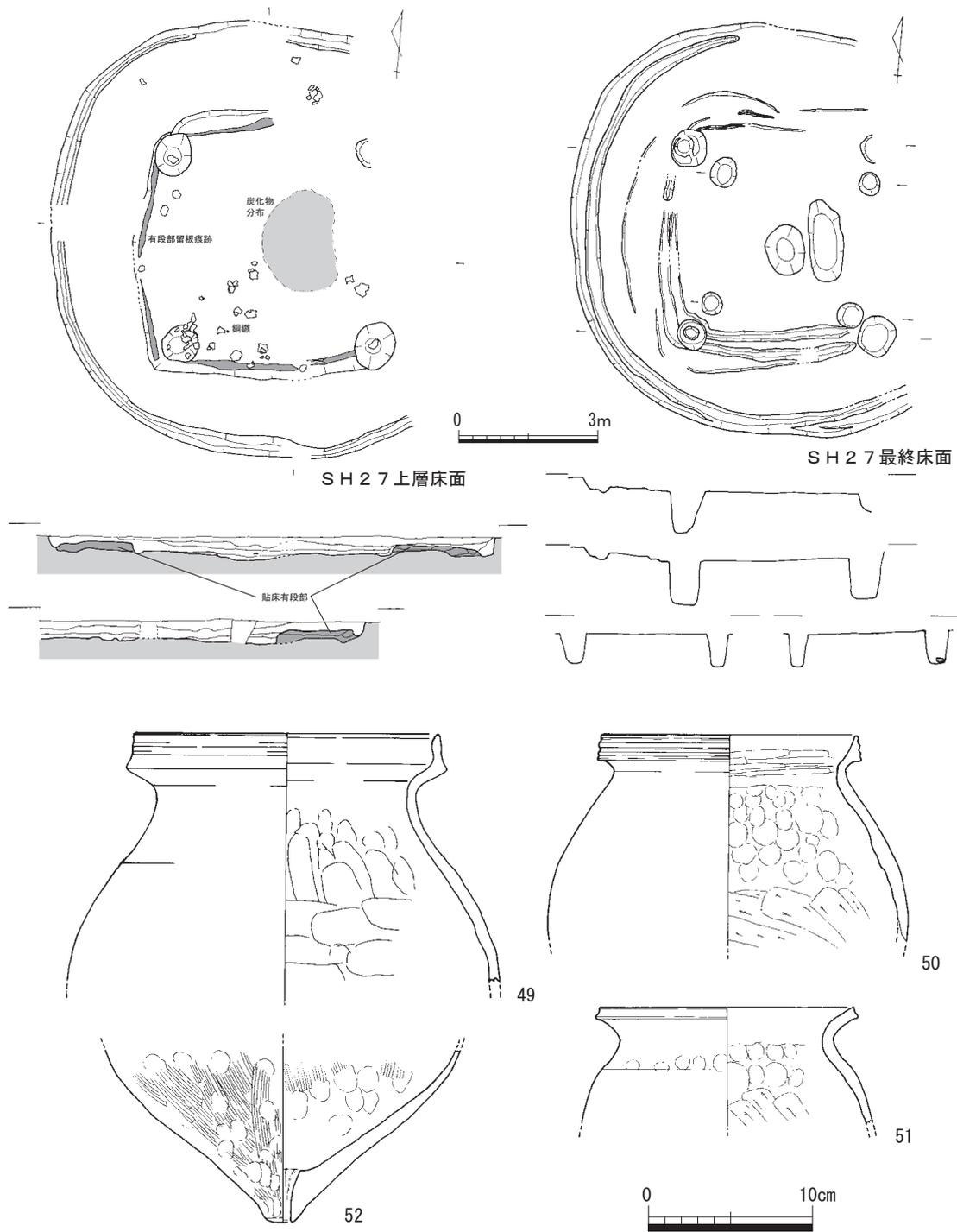


図 1 3 竪穴住居 SH27 および出土遺物実測図

< SK08 出土土器 > (図 14)

井戸状遺構の埋没途上に一括投棄された後期後半古相の土器資料である。口縁部に凹線文をもつ土器が消失し、壺・甕ともに口縁部拡張を行わない。高杯は組成せず、58・59の平底の鉢、57の脚台付鉢が目立つ。60のような粗い作りの支脚が組成する。55の甕は外面へラ磨きがみられず、叩き成形後タテ刷毛調整のみで仕上げなど、従前の後期前半の属性を払拭した個体である。56はSH27の49と同様に口縁部を上方に立ち上げ



写真 13 D区 SH55 全景 (西より)



写真 14 B区 SH27 下層床面 (東より)



写真 15 B区 SH27 有段部留板痕跡 (南より)



写真 16 A区 SK08 遺物出土状況 (北より)



写真 17 D区 焼失住居 SH42 (東より)



写真 18 D区 全景 (東より)

る形態だが、外面の凹線文はやや強めのナデに変化する。49とは異なり、口縁部と胴部の境が強く屈曲し、胴部の肩が張る後期前半的形態を留める。この形態の甕は平成7年度研修棟調査区SK12で出土した後期前半新相土器群(森下編1996)から認められ、当該期にかけて多くの遺構で出土する特徴的な形式である。東予地域や備後地域の同時期資料に類似する形態がある(柴田2000)。また、吉野川上流域では後期初頭から系譜をたどることが可能な資料群もある。比較的広域あるいは遠隔地間で展開する形式とみられる。

< SH02・SH42・SH44 出土土器 > (図15～17)

終末期の土器資料である。SH02資料は住居廃絶後に一括投棄された一群で、61・64～66の平底と62の尖底が共存する。65・66は口径が13～15cmとやや大きい割りに、器高も維持していることから、終末期古相に位置づけられる。SH44資料は安定した平底甕68と底部丸底の鉢が住居床面で共存し、SH44を切り込む

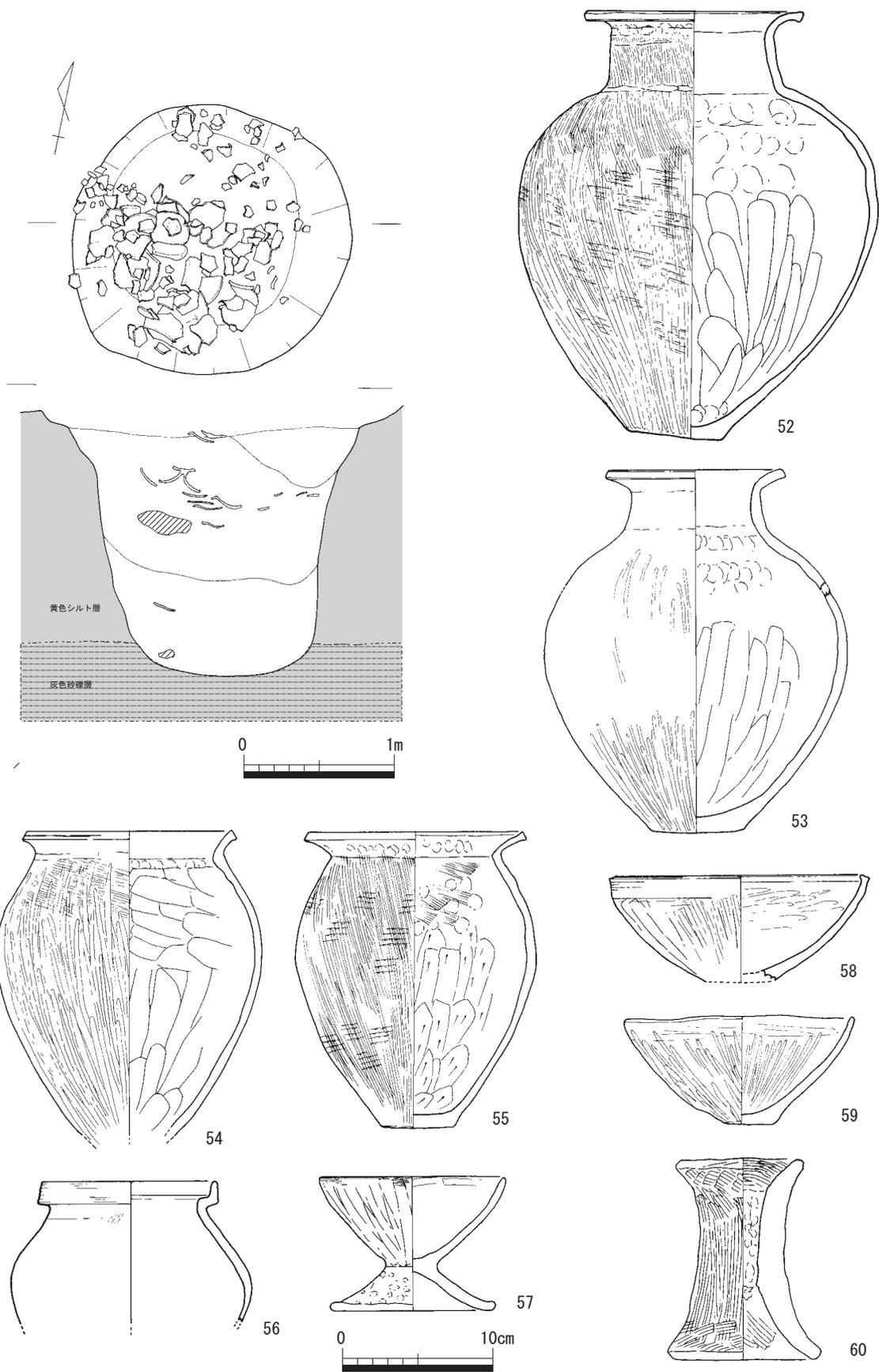


図14 井戸状遺構 SK08 および出土遺物実測図

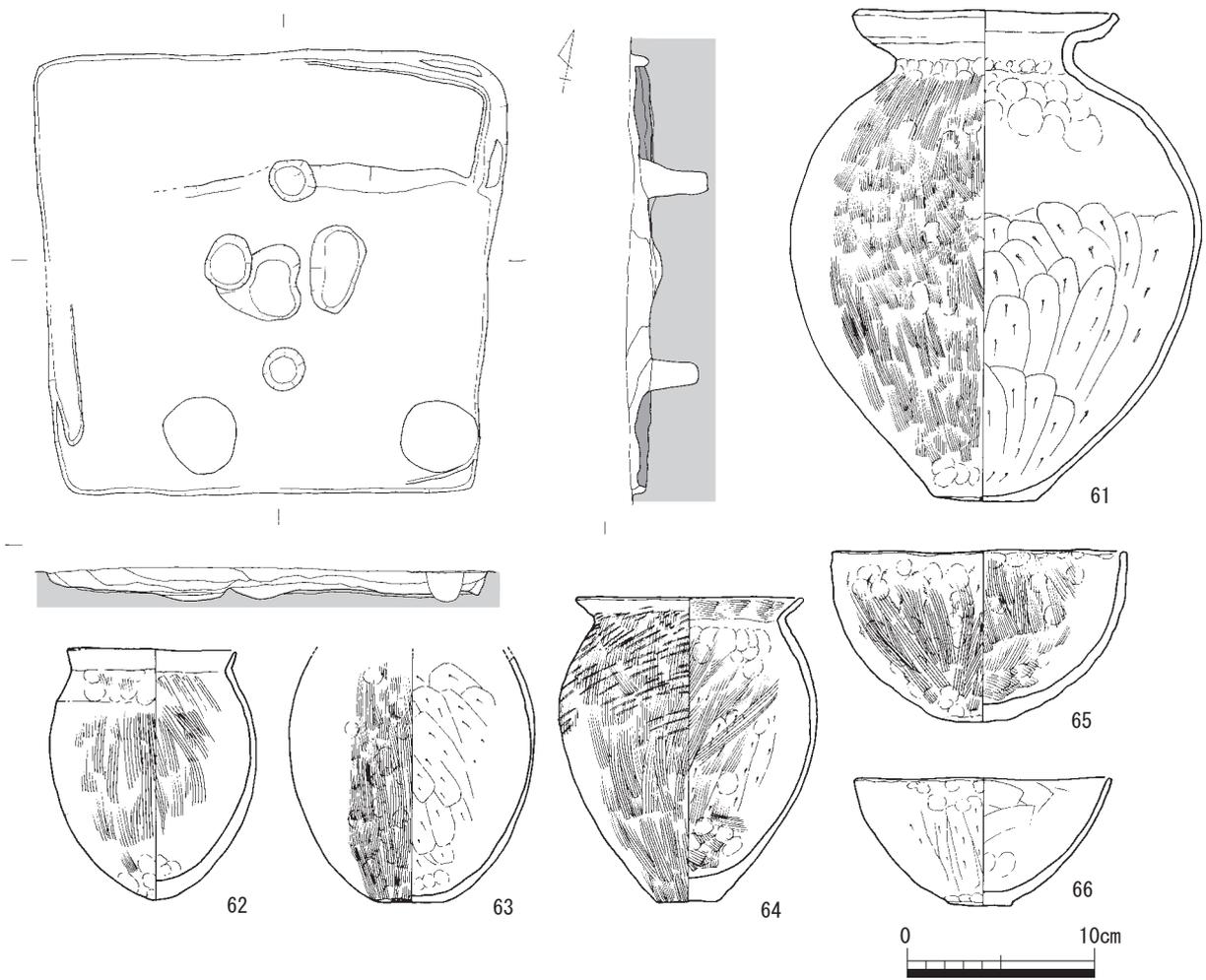


图 1 5 竖穴住居 SH02 および出土遺物実測図

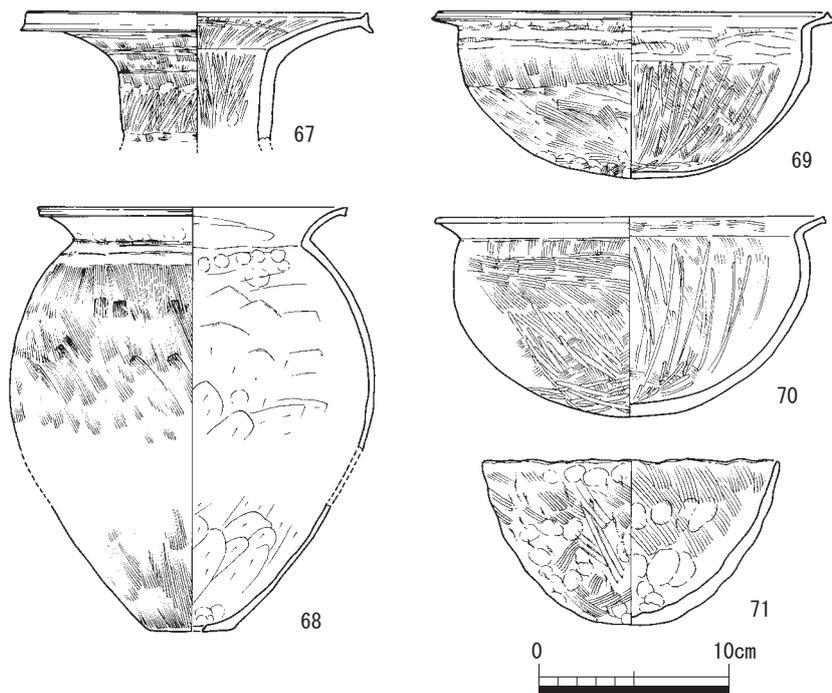


图 1 6 竖穴住居 SH44 出土遺物実測図

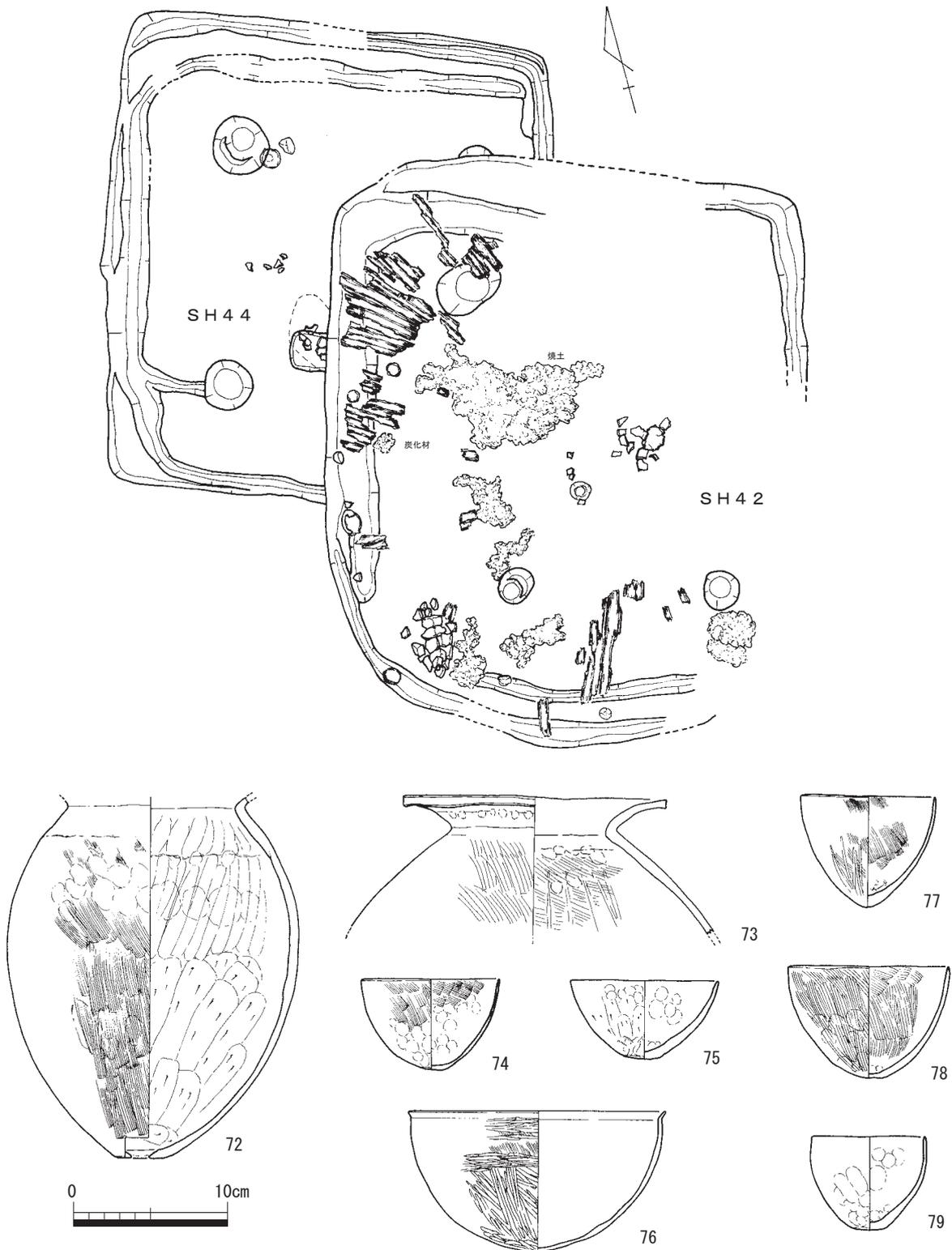


図17 竪穴住居 SH42・44 および出土遺物実測図

焼失住居 SH42 出土の土器は尖底や丸底の口径 10cm 以下の小形鉢が目立つ。両住居の土器には底部形態等を比較すると時期差を見出し難いが、小形鉢盛行に新出要素を看守できる。終末期中相～新相に位置づけられよう。

<土器棺墓> (図 18)

今回の調査範囲内で3基の土器棺墓を確認した。ST01・02はB区竪穴住居SH27とSH29の間に隣接して設置される。ST03はD区SK39を中央土坑として復元される後期中葉の竪穴住居や中期の掘立柱建物SB18を切り込んで単独で設置される。いずれも棺材には中大形の壺を使用し、鉢ないし壺底部片を蓋材とする。設置掘り方はST01・03が棺材より一回り大きく方形に掘削する。ST03は棺材にはほぼ密着した掘り方である。埋設角度はいずれも斜めである。攪乱等によって全形をとどめるものはないが、棺材内部に転落した土器片とそれ以下の埋没土は良好に残る。

ST01 棺材内埋土最下層は黒色のきめ細かい粘土で構成され、粘土中にヒトの歯牙が残存した。慎重に検出作業を行った結果、歯牙の平面分布が2箇所に分かれ、両分布範囲に前歯から臼歯までが揃うことなどから、両ブロックはヒト1体の上顎・下顎のまとまりと考えられた。各ブロックの歯牙数は、下顎が20本、上顎が17本、出土位置不明の歯牙2本で合計37本の歯牙が確認できた。この数は成人の歯牙数28本と比較して9本多い。乳歯から永久歯への生え変わりの状態であったことが推定できる。詳細な鑑定を依頼中だが、現代の子供に当てはめると概ね6～10歳という年齢が推定できる。



写真 19 ST01 棺内出土歯牙

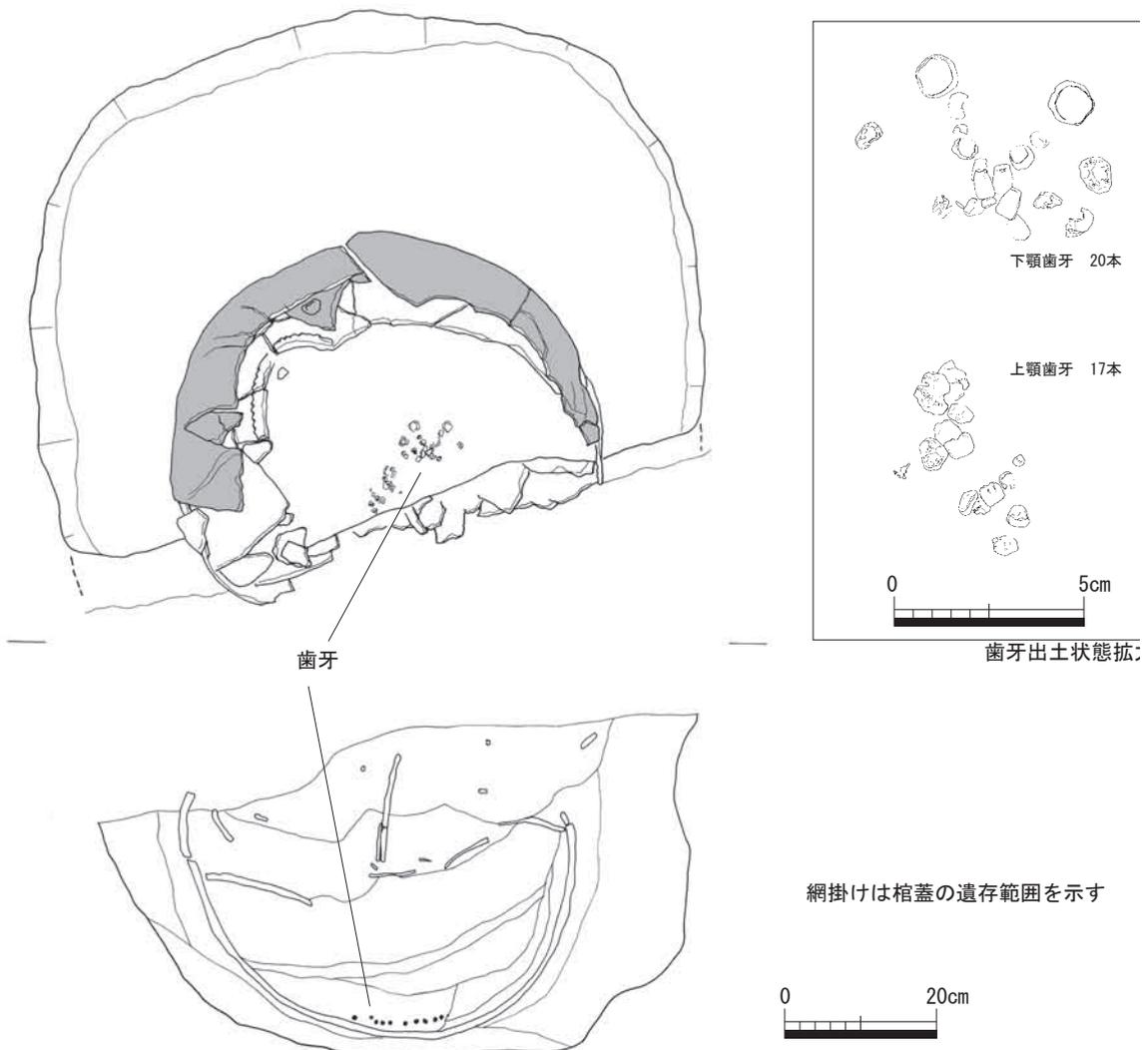


図 18 土器棺 ST01 実測図



写真 20 B区土器棺 ST01 (北より)



写真 21 B区土器棺 ST01 (南より)

<青銅器・玉類>

竪穴住居や掘立柱建物柱穴埋土中より青銅器や玉類が出土している。青銅器は一部の小片を除いて、すべて銅鏃である。形式が判明するものはすべて有茎式で、鏃身長が2～3cmの小形品と、4.5cmの大形品がある。81の大形品は鏃身中央に鑄と樋をとどめる。小形品は逆刺や茎に鑄造後の研磨が不十分さを残す。連鑄式鑄型を使用した製品と推定される。後期後半古相～終末期の竪穴住居埋土中より出土したものが多い。床面直上で出土したもの（SH27・SH35など）もあるが、竪穴住居埋没途上の堆積土中から出土するもの（SH40・

SH42・SH44など）も多い。前者は後期後半、後者は終末期の住居に目立つ。また、後者は竪穴住居廃絶後の窪みに投棄したものと目される。出土分布を点検すると、C区に特に目立つ。

玉類はヒスイ製勾玉1、碧玉製管玉2点、ガラス小玉19点が出土した。多くは後期以後の竪穴住居より出土しているが、管玉1点は1間×7間の掘立柱建物SB10の柱穴より出土しており、弥生時代中期後半古相に位置づけられる。出土位置は特に偏ることはない。また、特定遺構で多量に出土する事例はなく、竪穴住居を構成する柱穴の



図 20 玉類・銅鏃出土位置



写真 22 竪穴住居出土の銅鏃



写真 23 竪穴住居等出土の玉類

柱抜取跡より 3 点出土したにとどまる。

ヒスイ製勾玉は長さ 1.1cm、厚さ 0.3cm の小形品で、器体断面は矩形を呈す。穿孔は直径 0.2cm (最大径) で、表裏両方から穿孔する。透明感のある明緑色である。碧玉製管玉は長さ 0.95cm、直径 0.45cm と、長さ 1.2cm、直径 0.3cm で、いずれも表面風化のない深緑色を呈す。表裏両方から穿孔するものと、一方からのみ穿孔するものがある。

ガラス玉は直径 0.25cm ~ 0.45cm で、淡青色・濃青色・明緑色などのバリエーションがある。

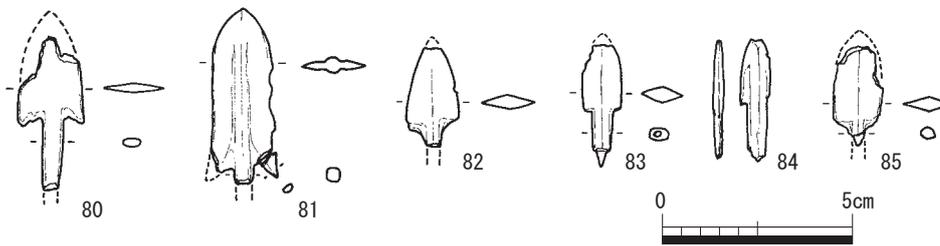


図 19 銅鏃実測図

<鍛冶関連遺構・遺物>

当遺跡で出土した弥生時代の鉄器は、現在のところ確実なもので 16 点を数える。内訳は鉄鏃 3 点、ヤリガンナ 1 点、板状鉄斧 1 点、不明鉄器 11 点である。ただし、いずれも錆化が顕著で器種の認定は不確実である。現在保存処理中であり、処理後の観察によって、詳細が判明するものとする。各鉄器の所属時期は、後期前半に板状鉄斧が 1 点・不明鉄器 3 点、後期後半から終末期に鉄鏃 3 点・ヤリガンナ 1 点、その他の不明鉄器が所属する。出土遺構は竪穴住居が最も多く 14 点出土しており、他の 2 点は同時期の低地帯 SR02 出土である。竪穴住居のうち鍛冶遺構と認定される SH51 中央土坑 (鍛冶炉) 周辺では合計 6 点の鉄器 (鉄鏃 1 点、ヤリガンナ 1 点、他は不明鉄器) が出土している。

鍛冶関連微細鉄資料は表 4 のように 54 単位の資料を水洗選別により抽出した。抽出遺構は竪穴住居 SH51 関係と、SK39 (未設定竪穴住居の中央土坑)・SP1869 (同じ竪穴住居の柱穴) 関係、それに SR02 の層位別資料が加わる。さらに、平成 14 年度下半期調査

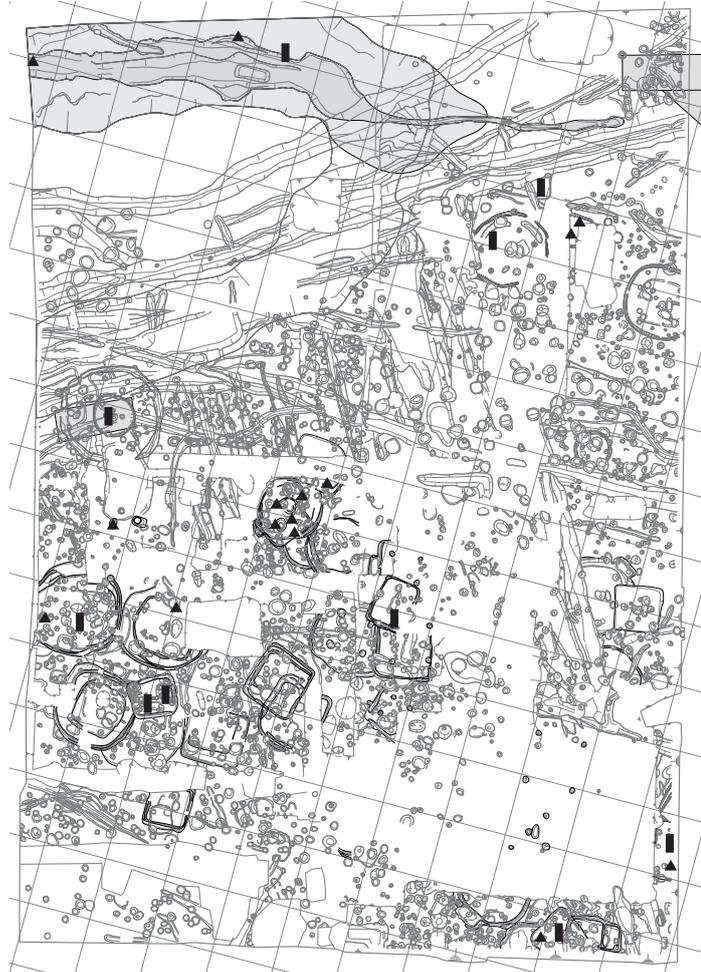
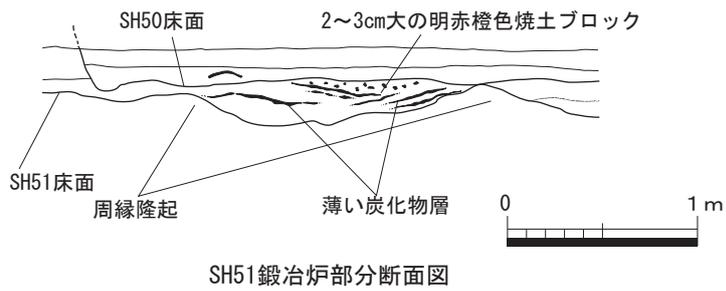
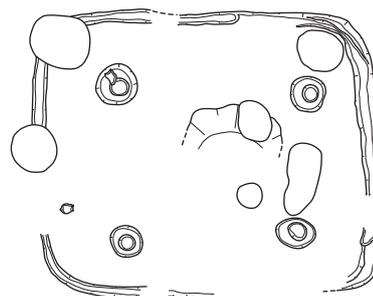


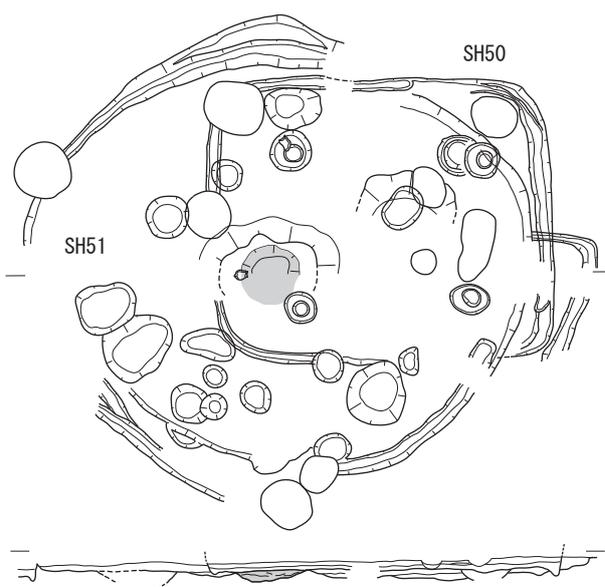
図 21 鉄器・砥石出土位置



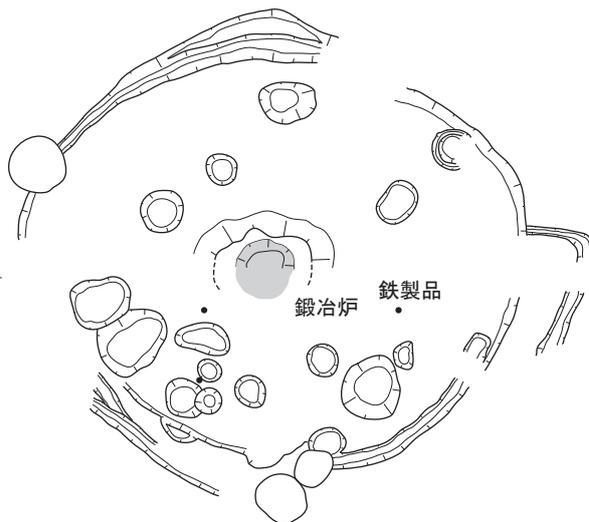
SH51 鍛冶炉部分断面図



SH50 平面図



SH50・51 平面図



SH51 平面図

図 2 2 竪穴住居 SH50・SH51 (鍛冶遺構) 実測図



写真 24 鍛冶遺構 SH51 全景 (北より)



写真 25 SH51 鍛冶炉断面 1



写真 26 SH51 鍛冶炉断面 2



写真 27 SH51 鍛冶炉断面 3

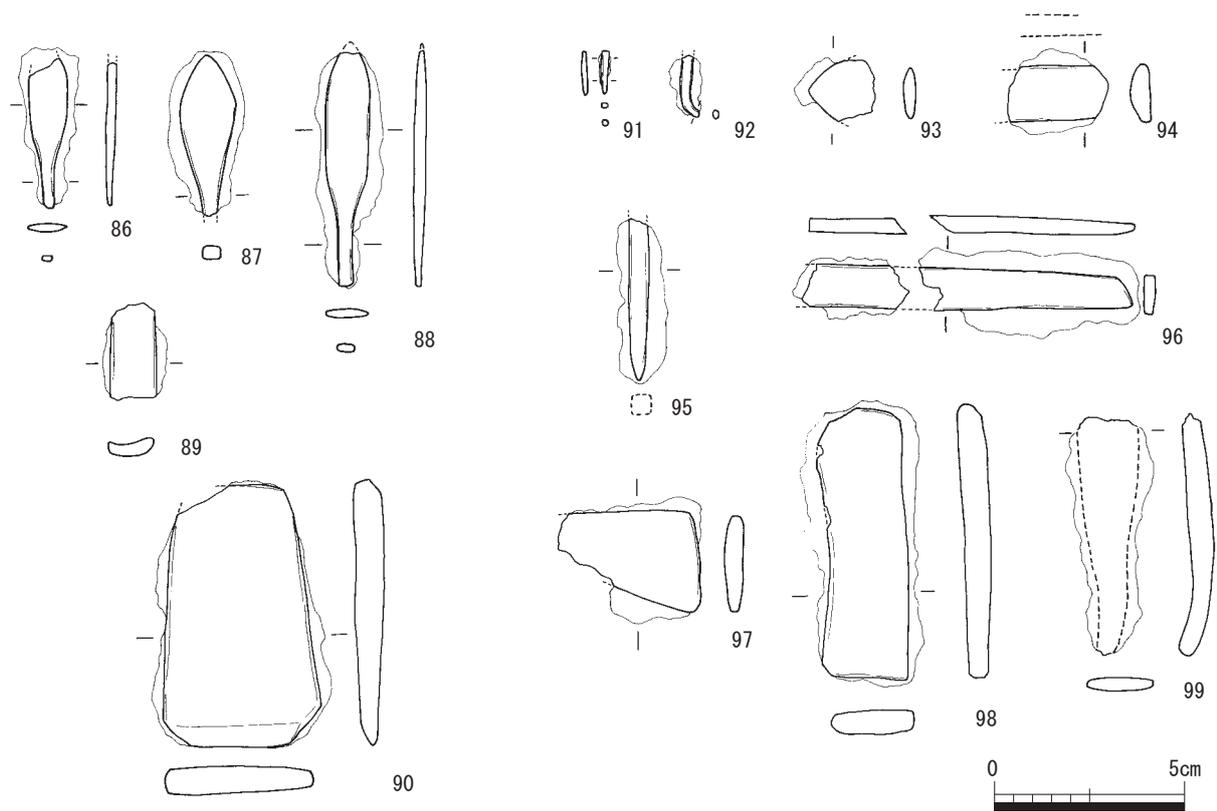


図 2 3 鉄器実測図

番号	出土遺構	器種	遺存部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	所属時期	X線写真番号	備考
86	SH01	鉄鏃	ほぼ完形				終末期	6	柳葉式
87	SH51	鉄鏃	茎部以上				後期後半	17	柳葉式
88	SH06	鉄鏃	ほぼ完形				終末期	12	柳葉式
89	SH51	刃片	基部片				後期後半	8	裏又キ
90	SH29	板状鉄斧	ほぼ完形				後期前半	13	片刃
91	SH51	針状鉄片	微小				後期後半	2	非定形器種
92	SK39	針状鉄片	微小				後期後半	1	非定形器種
93	SH35	鉄片	—				後期後半	7	非定形器種
94	SH51	鉄片	—				後期後半	18	非定形器種
95	SH50	棒状鉄片	—				終末期	14	非定形器種
96	SH38	板状鉄片	—				後期後半	10	非定形器種
97	SH52	板状鉄片	—				終末期	11	非定形器種
98	SR02 上層	板状鉄片	—				終末期	9	非定形器種
99	SR02 上層溝下層	板状鉄片	—				後期前半	5	非定形器種

表 3 鉄器・鉄製品一覧表



写真 28 出土鉄器・鉄製品

写真 29 鍛冶関連微細鉄資料

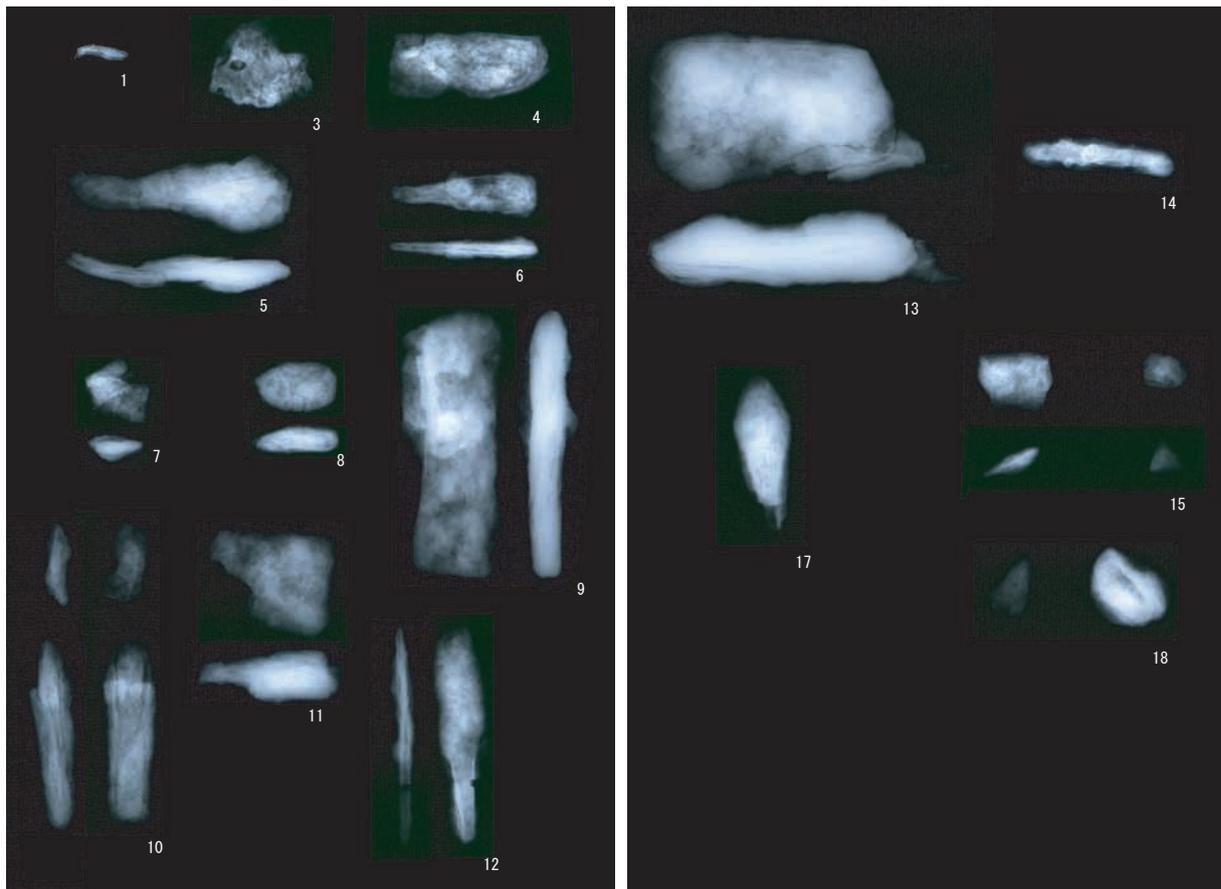


写真 30 鉄器・鉄製品 X線写真

遺構名	所属時期	取上単位	篩区分	構成	重量	重量小計	所 見
SH50	終末期	NZR-M0011	細	鍛錬 表面気泡	0.01	0.03	中央の浅い土坑の炭化物層より出土
		NZR-M0012	細	球状滓	0.02		
SH51	後期後半	NZR-M0014	粗	微小鉄片 鍛錬	0.08	0.26	SH51は直径約6mの円形住居。南西に短い張出部をもつ。主柱穴は4ないし5本で中央に焼土・炭化物が顕著な土坑(直径約60cm)が1基ある。土坑上面は小粒焼土が集中。その下面に複数の炭化物層が広がる。土坑の周縁には、高さ約5cmの高まりが廻る。土壌試料は中央土坑及び埋土中から採取したもの。調査中に「SH50下層」として取上げた土壌は本来の床面より下の層位となるので、SH51の埋土上部とした。
		NZR-M0015	細		0.02		
		NZR-M0016	細		0.03		
		NZR-M0017	細		0.01		
		NZR-M0018	細		0.01		
		NZR-M0019	細	鍛造剥片	0.01		
		NZR-M0020	細		0.01		
		NZR-M0021	細		0.02		
		NZR-M0043	粗		0.01		
		NZR-M0044	粗		0.01		
		NZR-M0045	粗		0.02		
		NZR-M0046	粗		0.01		
SK39 SP1869	後期後半	NZR-M0023	粗	球状滓 微小鉄片	0.78	0.83	削平された竪穴住居の中央土坑。堆積層中に薄い炭化物層。ほかに針状鉄片が1点出土。SP1869はSK39に伴う竪穴住居主柱穴と目される。なお、SK39に近接して、後期後半の土器棺ST03がある。ST03は竪穴住居の埋土を切り込んで設置されたもので、棺設置に伴う掘り方埋土より、同様の微細鉄資料が出土。
		NZR-M0049	粗		0.02		
		NZR-M0050	細		0.01		
		NZR-M0051	粗		0.01		
		NZR-M0052	細		0.01		
SR02 上層		NZR-M0003	粗	鍛造剥片 球状滓	0.04	5.13	SR02は居住域に近接する低地帯 弥生後期初頭頃に大方埋没するが、その後低地帯中央部に溝が掘削される。溝は後期前半から土器等の廃棄場となり、後期後半に溝が埋没した後も、当初の低地帯範囲一帯にまで土器等を大量に廃棄する。廃棄された土器は終末期(庄内並行期)が下限。 上層 終末期 上層溝上層 後期後半 上層溝下層 後期前半新相～後半古相 上層溝最下層 後期前半
		NZR-M0004	粗		0.91		
		NZR-M0005	細		0.56		
		NZR-M0006	細		1.69		
		NZR-M0007	粗		1.75		
		NZR-M0053	粗		0.03		
SR02 上層溝上層		NZR-M0009	細		1.49	2.34	
SR02 上層溝下層		NZR-M0008	細		0.76		
SR02 上層溝最下層		NZR-M0010	細		0.09		

表 4 鍛冶関連微細鉄資料一覧表

資料を加えたものである。微細鉄関連資料は竪穴住居中央土坑を中心として土壌を採取し、水洗選別により砂粒を篩い分け、乾燥後磁着するもののうち、実体顕微鏡で観察して鍛冶関連と考えられるものを抽出したものである。これらには、微小な鉄片・表面が発泡したような薄い膜状のもの・球形を呈すものなどがあり、表面に光沢のあるガラス質成分を含むと考えられるものもある。

流路 SR02 上層からその下位の SR02 上層溝にわたる層位別土壌資料で定量的に微細鉄関連資料の重量を比較すると、弥生時代終末期の SR02 上層に最も多く約 8 割を占め、下位にしたがってその比率が減少する。

なお、たたら研究会大澤正己氏より一部の切片観察が行われ、弥生時代鍛造剥片に特徴的な三層構造は認められないという結果が提示された。しかし、弥生時代鍛造剥片のすべてに三層構造がみられるわけではなく、また、古墳時代以後の球状滓・鍛造剥片と比較すると、肉眼観察においてはきわめてよく似ているようである。科学分析は今後も複数の視点・手法によって継続する必要がある。

SH51 は直径 4.9 m で円形張出付の竪穴住居である。住居中央には通常の竪穴住居にみられる a 形態や b 形態の炉跡ではなく、直径約 1 m で円形の周縁隆起を伴う深さ約 34cm の炉跡がある。隆起は一部地山削出、一部は盛土で形成し、内部埋土の上半に層厚 1cm 内外の薄い炭化物層が複数面みられる。最上部の炭化物層の窪みには直径数 cm 大の焼土粒が密集していた。この炉跡埋土および周辺の土壌に鍛造剥片、微小鉄片、球

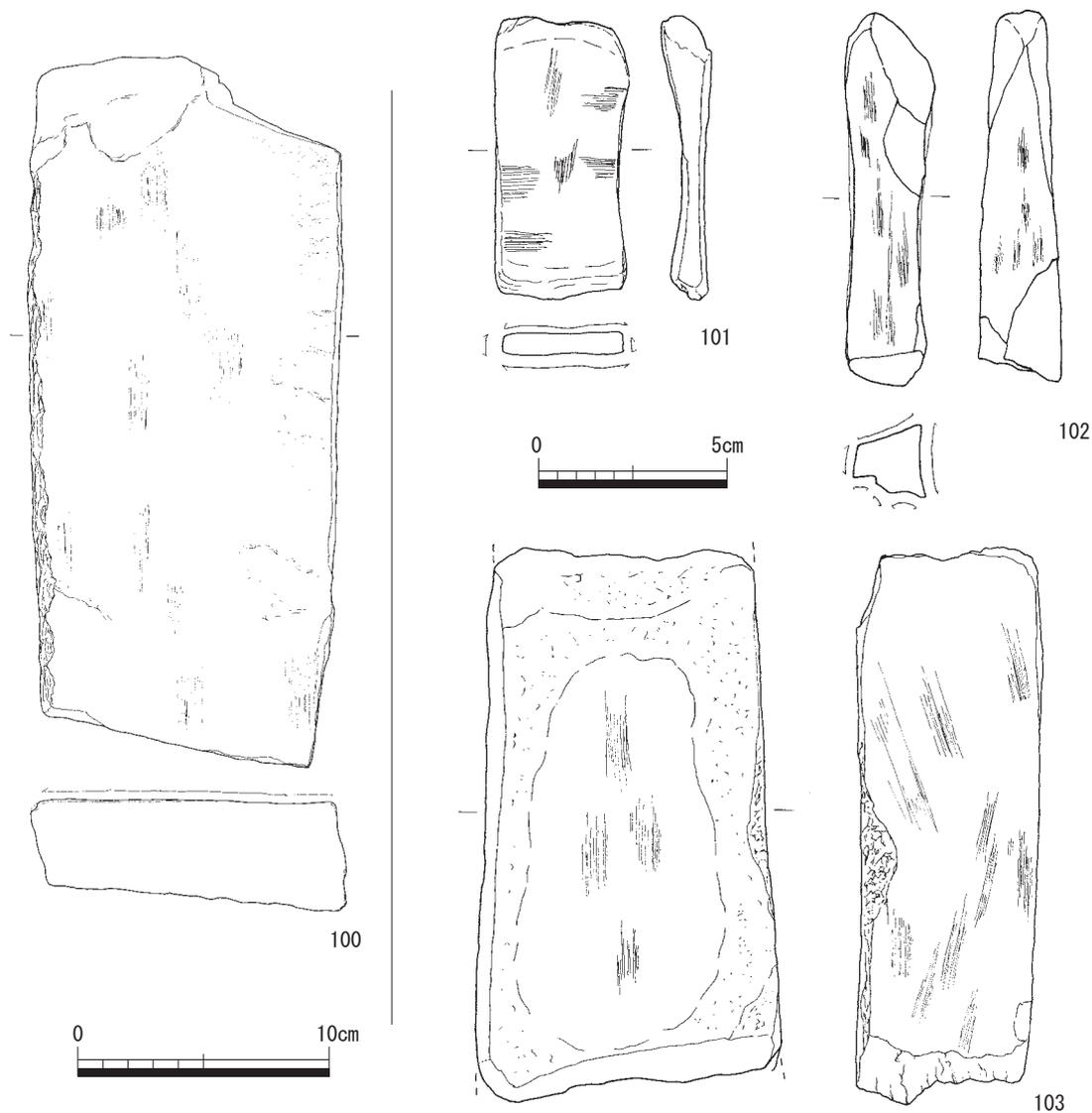


図 2 4 砥石実測図

状滓が含まれる。これとは別に床面が部分的に強く被熱し赤色化及び硬化する住居もある。SH04・SH10・SH29・SH35には複数箇所にもそのような焼土面が認められた。さらに、平成14年度下半期調査の竪穴住居（H区SH1007）では住居の埋没途上に同様の焼土面があり、鍛冶関連微細鉄資料を伴う事例もみられる。SH51は鉄片資料が多く、炉跡形状も鍛冶炉と認定しうる形態をもつことから、ほぼ確実に鍛冶遺構と言えるが、それ以外の竪穴住居においても、鍛冶関連微細鉄資料が回収されていること、また流路に多くの鍛冶関連微細鉄資料があることからみて、当遺跡内では弥生後期以後、頻繁な鍛冶作業をおこなっていた可能性が考えられる。鍛冶技術の水準や生産される鉄器の組成、他の遺跡と比較した場合の普遍性の評価など、今後検討すべき事例が多い。

<砥石>（図24）

出土した砥石は5cm前後の小形品から30cm大の大形品まで各サイズが揃い、方柱状、板状など12点がある。100はB区SH31出土の安山岩製板状砥石である。板状石材を分割し側縁を敲打成形し、平坦な節理面を砥面に使用する。砥面は短軸方向が平坦長軸方向に僅かな凹面をもつ。後期初頭に所属する。101はA区SD13出土の安山岩製板状砥石、102はA区SH01出土の流紋岩製方柱状砥石である。いずれも終末期に所属する。103はB区出土の安山岩製板状砥石である。正面および側縁に砥面をもつ。後期後半土器群に伴って出土した。このほか、103と同サイズで断面多角形の流紋岩製砥面（SH39終末期）も出土している。

砥石の形態は中期末から後期前半（あるいは後期後半古相）までは安山岩製のものが多く、また100や103のような広い平坦面をもつものが多く、斧などの大型器種に対応する。一方、後期後半新相から終末期には流紋岩製で砥面が比較的狭いものが多く、加工具等の小形器種に対応する。いずれも砥面は平坦か一方方向にのみ凹面をもつタイプが多く、表面に細かな研磨痕がみられる。当地域では弥生時代前期段階では砂岩製砥石が一般的であり、中期以後に火成岩製砥石が増加する。石器用か鉄器用か判断するのは困難であるが、形状と量的な増加傾向からみて鉄器用砥石の可能性が高い。



写真31 E区SR02上層土器群（東より）



写真32 E区SR02上層溝下層土器群（東より）



写真33 E区SR02上層溝断面（西より）

＜流路 SR02 上層溝＞（図 26）

SR02 は D 区から B 区へ東方向に流下した後、B 区西側で急速に屈曲蛇行して西側の E 区方向に抜ける自然流路である。流路最下層には縄文晩期後半の突帯文土器を含む堆積層があり、その上部に弥生中期後半古相の黒色粘土層、中期後半中相の灰色シルト層、最上部に中期末～後期初頭の褐色シルト層の順で堆積後、ほぼ埋没する。一方、河川埋没後の低地中央には流下方向に沿って幅 3 m、長さ 50 m の溝が掘削される。掘削位置からみて、湿潤な後背湿地における排水意図が看守できる。溝は後期前半新相から後期後半古相にかけて多量の土器投棄を伴いながら埋没し、終末期には当初の流路域を覆う範囲にまで広く土器投棄が行われる。出土遺物は土器に限らず、溝下層では石器、焼土片、イノシシ・シカ・オオカミの歯牙・骨片、ガラス玉、銅鏃など多彩な遺物が含まれる。生活域に近接した廃棄物投棄の性格が推定できる。溝下層、溝上層、さらに流路を最終埋没させる終末期の流路上層の土壌を土嚢袋 10 袋づつ採取し、水洗選別して磁着した資料が先の微細鉄関連資料である。

溝出土の土器は遺存状態の良いものが多い。図 28 の 104～111 は後期前半新相と後半古相の時期幅をもつ土器群である。106・107 は口縁部を上方に立ち上げる甕で、胴部は肩張りを留めるが、底部付近が突出しない後期後半古相の特徴を有す。当遺跡に多く出土する形態である。105～107 は B 区 SR02 上層溝の東延長部

でまとまって出土した一群である。108～110 は E 区中央付近の土器群である。109 は外面全面と口縁部内面に赤色顔料を塗布する脚台付鉢である。

そのほか、116・117 は溝下層で出土した完形の直口壺 2 点である。116 は口縁部の立ち上がりが高く肩の張りが顕著で、口縁部外面に施された凹線文は退化しつつも明瞭である。底部は径が大きく胴部下半のへら磨きが丁寧に施される。一方で 117 は器形・文様ともに退化・弛緩が顕著である。前者が中期的様相が強い後期前半期、後者は後期後半に位置づけられる。

118・119 は SR02 上層土器群出土である。118 は小型化した甕で底部は平底をとどめる。終末期でもやや古相を示す。119 は口縁部がくの字に屈曲する鉢で、底部がほぼ球形に仕上げられる。SH44 資料では両者が共存する。

搬入土器あるいは搬入系土器と目される土器も多い。112 は頸部に断面三角形突帯、口縁部を内側に折り返して拡張する手法など、



写真 34 E 区 SRT02 上層溝出土土器 (112)



写真 35 E 区 SRT02 上層溝出土土器 (108・117)

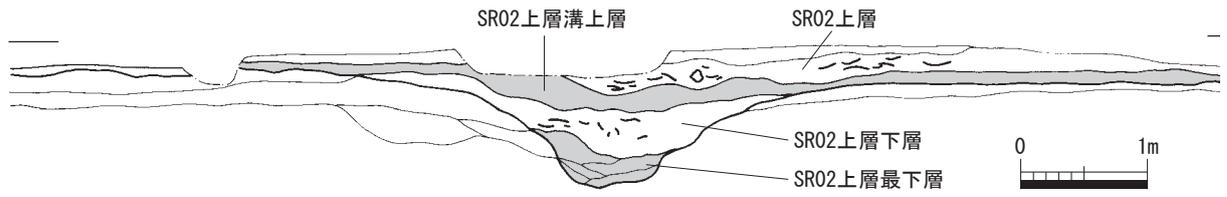


图 2 5 低地带 SR02 上層溝土層断面图

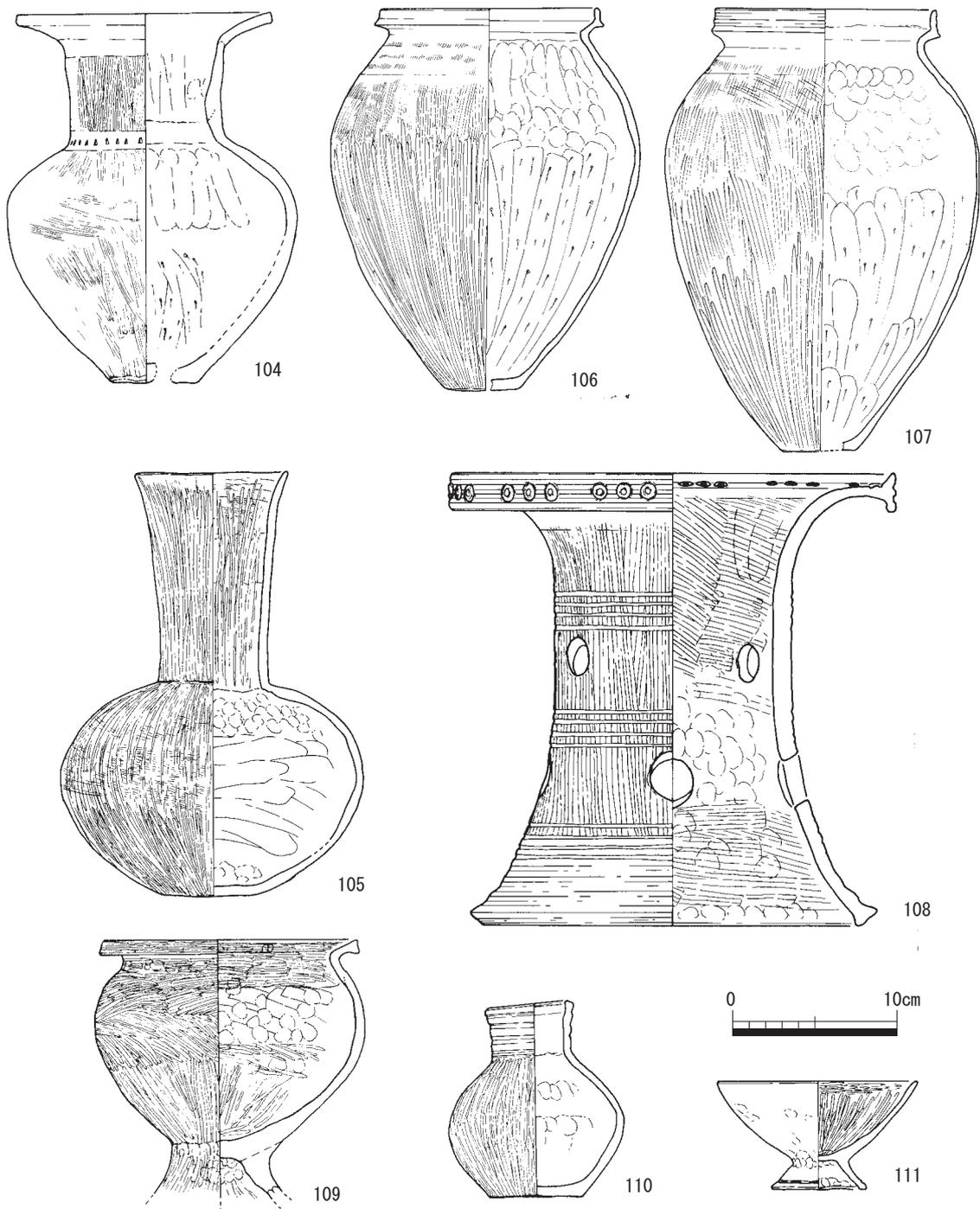


图 2 6 低地带 SR02 上層溝出土遺物实测图 1

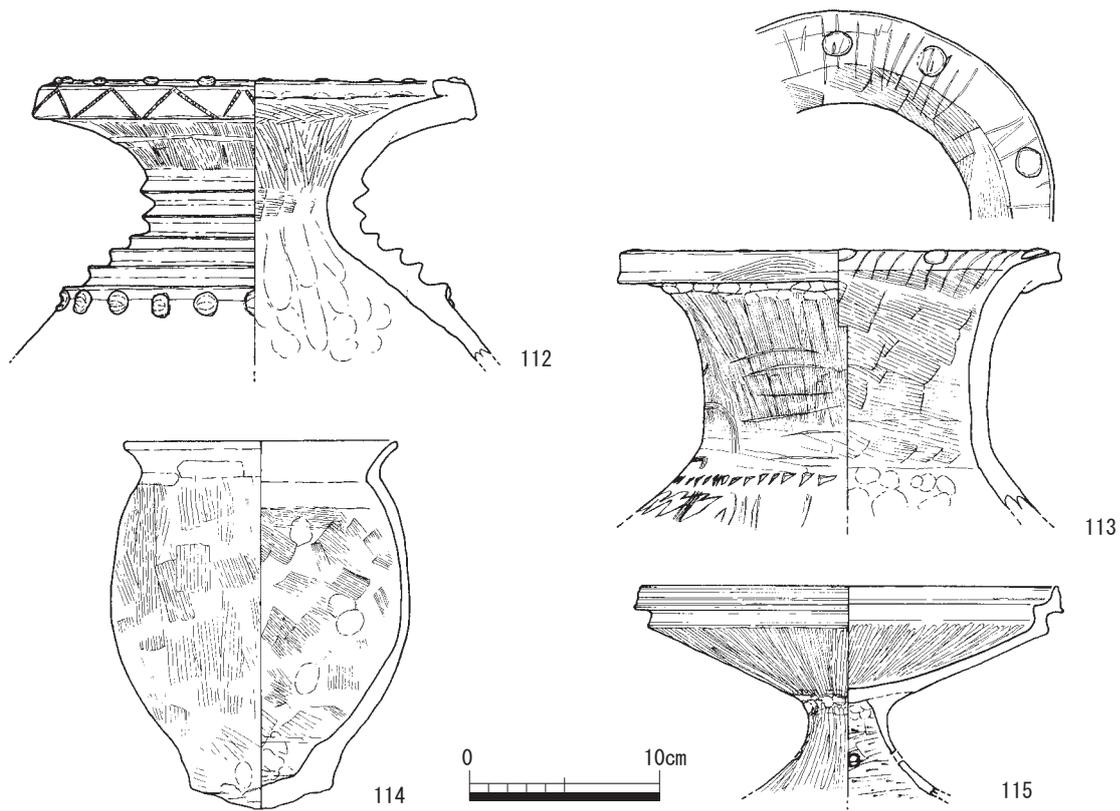


図 2 7 低地帯 SR02 上層溝出土遺物実測図 2

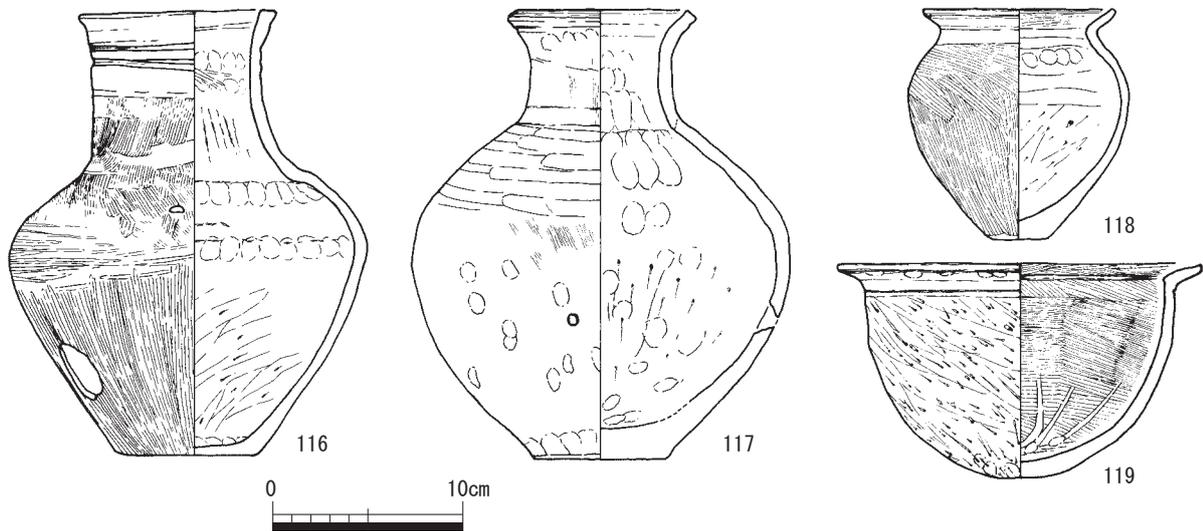


図 2 8 低地帯 SR02 上層溝出土遺物実測図 3

豊後地域に特徴的な土器である。胎土中に結晶片岩を多量に含んでおり、豊後の結晶片岩分布地域（大野川など）産の土器であろう。113は胎土は在地だが口縁部外面粘土帯貼り付けをもつ広口壺である。形態的には土佐地域に特徴的である。内面円形付文や外面の幾何学文様などは違和感がある。115は茶褐色で黒色の輝石結晶を多量に含む胎土の高杯である。形態・胎土ともに備中地域に似る。114は底部成形が極めて粗雑な甕である。終末期土器群に伴う。胎土はきめ細かく精良で、在地の胎土ではない。

6. 古代の遺構・遺物

調査地周辺は戦後の開発により、条里型地割が乱れている。しかし、近代初頭頃まで丸亀平野の中央部と同様の地割が広がっていたことを示す資料がある。弥生時代遺構を切り込んで、低地帯はもとより微高地上においても、地割に沿った用水路と推定される溝を多数確認した。溝の堆積層は砂礫が多く含まれており、水流で埋まった痕跡が明瞭である。丸亀平野では真北から30度西に偏った方向の条里地割が発達する。今回の調査で確認した溝の走行方向は、この条里地割と一致するものが最も多い（以下、条里型溝とする）。また、一部では正方位に走行する溝（正方位型溝とする）もあり、出土遺物と切り合い関係に基づいて、時間的変遷を辿

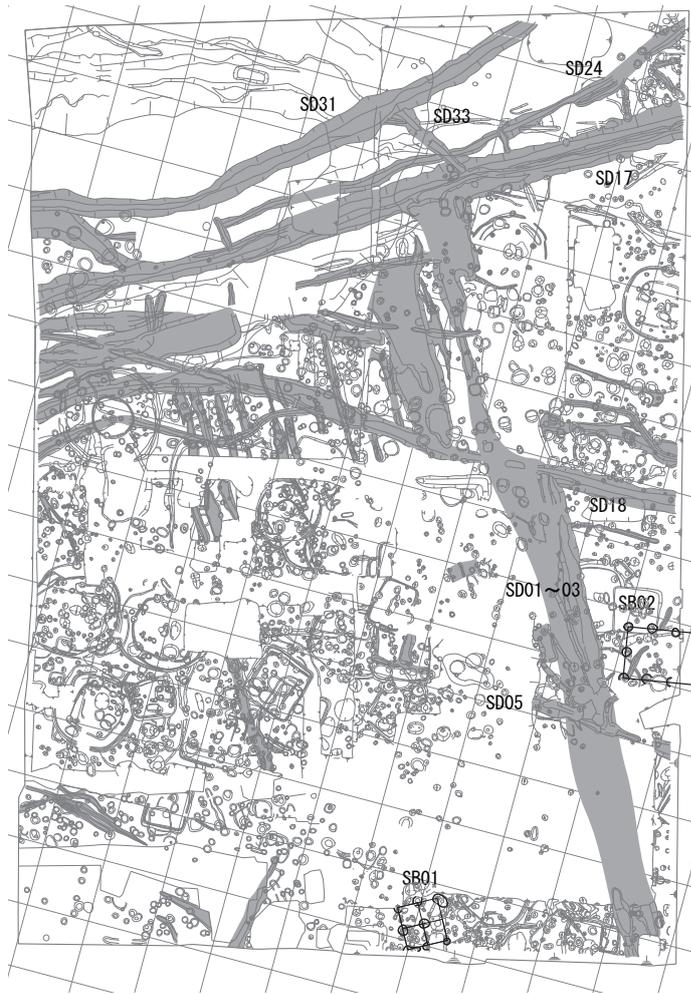


図29 古墳時代～古代遺構分布図

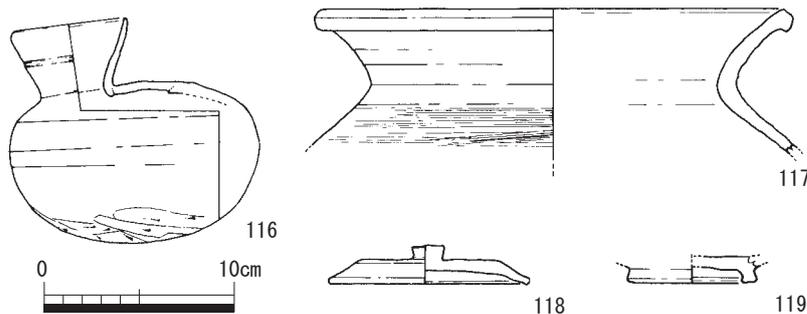


図30 条里関係遺構出土遺物実測図

れる資料もある。ただし、溝出土の遺物は必ずしもその所属時期を示している訳ではなく、周辺遺構との関係から慎重に時期決定を行う必要がある。もちろん、両方向以外の方向の溝もある（非条里型とする）。

このうち、SD17は幅4～5m深さ0.5～1mを計る東西方向の条里型大溝である。堆積層の一部には8世紀までの遺物しか含まない層があり、溝の掘削時期を示す。13世紀後半には周辺の礫を投棄しつつ完全に埋没する。

一方、SD01～SD03はA区南東隅からB区西側のSD17に向かって、直線的に掘削された条里型大溝である。元来は1本の溝であるが、攪乱や削平によって堆積単位ごとに遺構区分して調査を行った。SD01は8世紀代に埋没を完了する溝である。ただ、部分的に深い箇所もあれば浅い箇所もある。深い箇所は溝下部を基盤土ブロックで埋め戻し、浅い箇所と溝底を揃えた痕跡がある。最終的に褐色シルト層で自然埋没するが、水流痕跡は明瞭でない。SD02・SD03はいずれも礫や粗砂の堆積が顕著である。SD17の最終埋没に連動するものと考えられる。このように南北方向と東西方向の条里型大溝が交差する地点を調査

区内で特定することが可能性である。SD17とSD01～03の交点は、そのラインを延伸した場合、丸亀平野条里地割の坪境線に丁度重複する位置にあたる。つまり、この両溝を坪境溝と認定することが可能である。

そのほか、SD05・18・20・21などの正方位溝が8世紀埋



写真 36 B区条里溝 SD17 ほか（西より）

没の SD01・10 と共存する。これらの溝からは、7 世紀後半の須恵器も出土することから、掘削時期は条里型溝より古くさかのぼる可能性が高い。なお、条里地割と方向を違えて、間隔約 6 m で併走する非条里型溝 2 条（SD24・SD31）はいずれも 7 世紀中葉を下限とする溝である。地割施工直前の状態を示すものである。

7. まとめ

今回の調査範囲は、平成 5 年度に発掘調査が行われた保育所調査区、平成 7 年度の研修棟調査区、平成 5 年度の旧看護学校調査区をつなぐ南北 300 m の微高地想定エリアの中心付近に相当する。平成 8・9 年度に調査が行われた現看護学校調査区では、微高地縁辺の遺構と低地帯が明らかとなったが、今回の大規模調査では微高地中央部の様相とそれに近接する弥生期の低地帯の一角が新たに判明した。

戦後の再開発によって旧地形が失われている当該地域にあって、広範囲に調査を行うと微妙な地形の凹凸が明らかとなる。遺構の基盤となる地層は扇状地堆積層形成の下限はこれまで縄文時代後期ごろと漠然と予測されてきたが、今回黄色シルト層を開析して形成された SR02 最下層において縄文晩期後半の突帯文土器が検出されたことにより、扇状地堆積の停止時期が概ね示された。A 区から F 区にかけて確認した SR01 の最下層では、弥生時代前期前半新相の土器群が確認された。SR02 と比較すると浅く、最下層では基盤の黄色シルト層との区分が困難な箇所もあるが砂礫堆積物はみられない。扇状地堆積停止後の様相といえる。以後、微高地と低地の地形条件が安定し、微高地上には夥しい遺構が単一面で重複する様相が生じることになる。

微高地上の遺構は、まず弥生前期の土坑が数基ある。出土した土器は前期前半新相である。遠賀川系の甕とともに、口縁部無文の突帯文系壺、口縁部から大きく下がつて刻目突帯を貼付する突帯文系甕など、突帯文系土器属性が色濃く見られる。坂出市下川津遺跡第 2 低地帯流路 1 の前期堆積層上層土器群（森下・信里 1998）に対応できる。前期から中期前半までの遺構は微高地全体に広がるものではなく、局所的な短期間居住単位であったことが推定できる。

弥生時代中期の遺構は前半新相（Ⅲ－3 期）から認められる。掘立柱建物が最も多く、竪穴住居は中期末の 1 棟を確認したにすぎない。ただ、所属不明の柱穴も多く、削平されたこの時期の竪穴住居の存在も否定はできない。掘立柱建物は柱穴配置や柱痕跡の大きさからその多くを高床倉庫と考えた。高床倉庫が一定範囲に集中する様相は、普通寺市西碑殿遺跡（Ⅳ－3 期）に類例がある（廣瀬編 1995）。主軸方向が揃わない同様の掘立柱建物が 10 棟以上まとまっており、今回検出した建物群の様相に近い。建物群の中央部分には 1 間×1 間の大形建物がみられ、柱穴や柱痕跡のサイズが他の建物より一回り大きく、重層的な構造をもつ建物と推定されている（森下 1999）。

今回確認した建物群には、調査した範囲の中央付近に 1 間×7 間の大形建物がある。依然として直列する 2 棟の建物である可能性も否定はできないが、これが一つの建物とするならば、他の建物と比べて桁行が極端に長い建物となる。西碑殿例とは構造は異なるものの、このようにシンボリックな形態の建物が存在する点では共通する。また、建物柱穴の掘形が方形を呈するのも特徴的である。西碑殿のほかに同市矢ノ塚遺跡、あるいは丸亀平野内の同時期の遺跡では方形柱穴の建物が多い。高松平野以東では必ずしも一般的ではないことから時期差あるいは地域差として抽出しうる可能性がある。建物構造の時期的変化も今後検討すべき課題である。

弥生後期以後、調査範囲には多数の竪穴住居が構築されている。削平や攪乱等によって柱穴や中央土坑しか

残らないものも今後の整理によって多数抽出できる余地がある。後期初頭から終末期までの時期幅で各住居の所属時期を検討する必要がある。竪穴住居の床面には貼床が普遍的にみられ、それに伴って有段部（ベッド状遺構）をもつ形態が多い点は、今後住居様式の地域性を検討する材料になりうる。また、中央土坑の形状も他地域との比較材料である。竪穴住居から玉類や銅鏃が多く出土している。特に銅鏃の出土は当地域の他の弥生後期遺跡と比較しても特に目立っており、当遺跡の拠点性を反映する遺物かもしれない。

今回の調査成果の注目点として、弥生時代後期から終末期の鍛冶関連遺構・遺物の出土がある。鍛冶炉としたSH51中央土坑、SH51他出土の非定形の鉄片類、竪穴住居や低地帯で水洗選別により抽出した鍛冶関連微細鉄資料など、今回の調査範囲において鉄器の生産・加工等の活動を物語る複数の考古資料が得られた。SR02上層溝では後期前半から終末期まで、微細鉄資料の時期的連続データを得た。もっとも、大澤氏による微細鉄の科学分析では「調査した5点の微細遺物の鉍物組成は、暗黒色ガラス質スラグ（珪酸塩）中にヘーシナイト（ $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）系や他鉍物相を晶出していて、みなれた鍛冶・鍛打作業で派生する鉄酸化物構成鉍物（ヘマタイト： Fe_2O_3 、マグネタイト： Fe_3O_4 、ヴスタイト： FeO ）とは異なる」という結果により、鍛冶・鍛打作業を直接反映する遺物ではないとの見解が示されている。また、球状滓や鍛造剥片等が生成される状況は、1,000度を超える高温環境が前提である。それを反映する羽口等の鍛冶具の存在が想定されるが、遺物洗浄が9割方完了した現在でもまだ確認できないことから、元來定形的な羽口はなかったものと思われる。したがって、現段階では衆目一致の弥生時代鉄器生産資料とは必ずしも断定できないかもしれない。今後、分析資料の峻別や分析方法の検討を経て、改めて本報告で評価すべき課題であるが、古墳時代以後の定形的な鍛冶具が果たして弥生期にも普遍化できるかどうか、を検討する必要があるし、また愛知県南山畑遺跡（天野編1999）のように明らかな鍛冶遺構に上記の三層構造をもつ「鍛造剥片」を伴わない資料もあることから、鉄器や鉄片類の考古資料を基礎として、弥生期の鉄器生産をポジティブに検討する方向性も必要と考えられる。当遺跡のみならず、当地域弥生鉄器の地域性追究と連携しつつ進めるべき作業である。また、仮に鉄器生産を積極的に評価する場合、今回検出した鍛冶遺構SH51や微細鉄資料を抽出した各遺構の規模や形状は、当遺跡以外の弥生集落において一般的な竪穴住居と比較して、著しく異なる点は見出せない。またSH51の鍛冶炉とした遺構も、炭化物層や焼土塊の存在といった外見上は、既存の竪穴住居中央土坑に類例を多く見ることができる。したがって、鉄器生産が丸亀平野西部の拠点集落と評価される当遺跡における特殊性であるのか、あるいは微細鉄回収などの調査方法次第で今後普遍的に鉄器生産の痕跡が見出せるようになるか、今後ほかの遺跡の調査状況とも比較しつつ評価していく必要がある。

今回の旧練兵場遺跡発掘調査は4,000 m^2 という大規模な範囲の中で、微高地居住域が大部分を占める内容であった。これまで発掘調査が行われた近隣の彼ノ宗遺跡や弘田川西岸遺跡と同様に、居住域の具体的な内容が広範囲で明らかになった意義は大きい。出土した遺物はコンテナ約1,400箱である。調査後の図面・写真データは膨大で、今後の本報告作成に向けて検討・整理を行うべき事項が多いが、現段階で不十分ながらも作成した本書は、現在も引き続き行われている国立善通寺病院改修事業に伴う発掘調査現場の前線において、問題意識の深化や確認すべき重要事項の抽出、調査の鮮鋭化に寄与できるものとする。

発掘調査に当たって様々な視点から分析・助言・提言をいただいた調査協力者を記し、最後になりましたが深く感謝の意を表する次第である。

石黒立人・梅木謙一・大久保徹也・大澤正己・金田章裕・坂本憲昭・佐藤亜聖・佐藤寛介・角南総一郎・田崎博之・出原恵三・長友恒人・林大智・松井章・松木武彦・村上恭通・吉田広

<参考・引用文献>

- 天野博之編 1999 『南山山脚遺跡 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 10』 豊田市教育委員会
- 岩橋 孝 1991 「吉原火山山遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度』 香川県教育委員会
- 大北和美編 2001 『土井遺跡』 徳島県埋蔵文化財調査センター
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII』 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 大久保徹也・森格也 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊上天神遺跡』 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 香川県立善通寺第一高等学校歴
- 史同好会 1965 「善通寺市及び近郊における弥生式文化の生成と展開」『文化財協会報 特別号』 香川県文化財保護協会
- 片桐孝浩編 1996 『弘田川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報弘田川西岸遺跡平成7年度』 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 木下 晴一 1998 『旧練兵場遺跡V』 香川県教育委員会
- 國木 健司 1993 『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会
- 薦田 耕作 1987 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊矢ノ塚遺跡』 香川県教育委員会・日本道路公団
- 笹川龍一 1984 『仲村庵寺発掘調査報告(旧練兵場遺跡内)』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1985 『彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1986 『仙遊遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1988 『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1989 「大窪経塚古墳」『第25回埋蔵文化財研究会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 埋蔵文化財研究会
- 笹川 龍一 1989 『仲村庵寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1989 『稲木遺跡 県道西白方善通寺線概観踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 稲木遺跡発掘調査団
- 笹川 龍一 1991 『月信遺跡 県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 月信遺跡発掘調査団
- 笹川龍一編 1992 『史跡有岡古墳群(王墓山古墳) 保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1996 『香色山山頂遺跡群調査報告書～善通寺市内遺跡調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4～』 善通寺市教育委員会
- 塩崎 誠司 1997 『旧練兵場遺跡IV』 香川県教育委員会
- 柴田昌児 2000 「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
- 尽誠学園史学会 1959 「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西讃史誌 創刊号』 尽誠学園史学会
- 多賀茂治 1996 「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡 第6分冊』 兵庫県教育委員会
- 西岡 達哉 1997 『旧練兵場遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 西岡 達哉 1989 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊稲木遺跡』 香川県教育委員会・日本道路公団・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 信里 芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第16回古代学協会四国支部研究大会 弥生時代前期末・中期初頭の動態 研究発表要旨集』 古代学協会四国支部
- 廣瀬常雄編 1994 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 藤好 史郎・西村 尋文編 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII下川津遺跡』 香川県教育委員会・日本道路公団・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2000 「松並・中所遺跡竪穴住居について」『都市計画道路錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 村上恭通 1994 「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究 第41巻第3号』 考古学研究会
- 村上恭通 2002 「四国における古墳出現以前の鉄器生産」『論集 徳島の考古学』
- 森下 英治 1994 『旧練兵場遺跡一平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告一』 香川県教育委員会
- 森下 英治 1995 『旧練兵場遺跡II』 香川県教育委員会
- 森下 英治 1995 『旧練兵場遺跡II』 香川県教育委員会
- 森下 英治 1996 『旧練兵場遺跡III』 香川県教育委員会
- 森下英治編 1997 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊 三条黒島遺跡・川西北七条I遺跡』 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 森下 英治 1997 「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『(財) 香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下 英治 1999 「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『瀬戸内の弥生中期集落 古代学協会四国支部第13回大会資料』 古代学協会四国支部
- 森下 英治 2000 「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討(上)」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要9』 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治・信里 芳紀 1998 「讃岐地方における弥生土器の基準資料I—下川津遺跡出土前期弥生土器を中心に—」『(財) 香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VI』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 矢原高幸 1973 『善通寺市の古代文化』
- 渡部明夫編 1990 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊永井遺跡』 香川県教育委員会・日本道路公団・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

報 告 書 抄 録

ふりがな	きゅうれんぺいじょういせき1							
書名	国立普通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報1							
副書名	－平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告－							
編著者名	森下英治							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3249							
発行機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	西暦 2003年3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡番号					
旧練兵場遺跡	香川県普通 寺市仙遊町 2-1-1	37204		34度13分 36秒	133度46 分20秒	2001.4～ 2002.7	4,000	国立普通 寺病院改 修
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旧練兵場遺跡	集落跡	弥生時代・古代		竪穴住居・掘立柱建物・ 土坑・土器棺墓・溝		弥生土器・石器・鉄器・ 青銅器・玉類・須恵器・ 土師器・瓦器		弥生後期 の鍛冶遺 構

きゅうれんぺいじょう
旧 練 兵 場 遺 跡 発 掘 調 査 概 報 1

－平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告－

平成15年3月31日

編集・発行 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

Fax 0877-48-3249

印 刷 若葉プリント